

香美市教育委員会発掘調査報告書第3集

伏原遺跡

香美市立図書館建設工事に伴う発掘調査報告書

2022年2月

香 美 市 教 育 委 員 会

序

伏原遺跡は、香美市立図書館建設に伴う緊急調査として、平成30年度から令和元年度にかけて発掘調査が行われました。

当遺跡が所在する香美市土佐山田町には洪積世台地である長岡台地が東西に大きく広がります。この台地上に位置し、周辺にはひびのき遺跡などの弥生時代から中世にかけての集落跡が集中します。

高知県立埋蔵文化財センターが実施した、都市計画道路高知山田線の建設に伴う調査により伏原遺跡の特徴や範囲の解明が進み、報告書も刊行されています。

今回の調査では、弥生時代終末期の堅穴式住居跡や、古代の建物跡などが確認されました。墨書き土器が出土していることから今後、伏原遺跡と周辺遺跡の位置づけや性格を推し量るための資料となれば幸いです。

最後に、発掘調査を実施するにあたり多大なご理解とご協力をいただきました周辺住民の皆様、発掘作業及び整理作業に従事していただきました皆様、報告書作成に当たりご指導及びご教示いただきました関係各位に心から厚くお礼を申しあげます。

令和4年2月

高知県香美市教育委員会
教育長 白川 景子

例　　言

1. 本書は香美市立図書館建設工事に伴い、平成 30 年度から平成 31 年度（令和元年度）にかけて実施した、伏原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、香美市教育委員会が発掘調査を実施した。
3. 伏原遺跡は、長岡台地の縁辺部に立地する、弥生時代から近世・近代までの複合遺跡で、弥生時代から古代にかけての集落跡や古代の掘立柱建物跡群、中世の溝跡、近代の区画溝など多くの遺構・遺物が確認されている。
4. 所在地は、香美市土佐山田町楠目大ツカ西 741 である。
5. 発掘調査延べ面積は I 区 2,570m²、II 区 118m²であった。
6. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成 30 年度

総　括：香美市教育委員会教育長 時久恵子

総　務：香美市教育委員会生涯学習振興課長 岡本博章

　同文化班班長 依光伸枝

調査担当：同文化班主幹 小林麻由

平成 31 年度（令和元年度）

総　括：香美市教育委員会教育長 時久恵子

総　務：香美市教育委員会生涯学習振興課長 稲原美貴子

　同文化班班長 依光伸枝

調査担当：同文化班主幹 小林麻由

令和 2 年度

総　括：香美市教育委員会教育長 時久恵子

総　務：香美市教育委員会生涯学習振興課長 稲原美貴子

　同文化班班長 依光伸枝

　同文化班係長 田邊哲也

調査担当：同文化班主幹 小林麻由

令和 3 年度

総　括：香美市教育委員会教育長 時久恵子（令和 3 年 5 月 26 日より 白川景子）

総　務：香美市教育委員会生涯学習振興課長 稲原美貴子

　同文化班班長 宇根由紀

　同文化班係長 秋山貴史

調査担当：同文化班主幹 小林麻由

7. 本書の執筆、現場写真、遺物写真是すべて小林が行った。

8. 遺構については ST（竪穴住居跡）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、SD（溝）、P（柱穴）で表記した。また、掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位 N は世界測地系の GN である。

9. 遺物については原則として縮尺 1/3 で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表記している。
10. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては、下記の方々のご指導及び貴重なご教示、ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略・所属は令和 3 年度）
吉成承三、池澤俊幸、久家隆芳（公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）
濱田正尚（南国市文化財保護審議会委員）、宮里 修（高知大学人文社会科学部准教授）、
由利 崇（南国市教育委員会生涯学習課）
11. 調査にあたっては、JR 四国のご協力をいただいた。また、地域住民の方々からは遺跡に対するご理解とご協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。
12. 発掘作業及び整理作業については多くの方が炎天下のなか精力的に作業に従事された。記して敬意を表したい。
発掘作業 岩崎 啓、池 徹、伊藤真由（高知大学）、大石幸雄、大野久雄、小笠原正貴、刈谷富士子、小山 求、中山勇生、比山隆雄、藤方正治、松木富子、宮地麻未（高知大学）、
森木義彦、山本雪子
整理作業 入野三千子、岡崎希望、土居初子、橋田美紀、宮本幸子
現地測量 サン水道設備、舟谷益夫
13. 重機による表土剥ぎ、排土運搬、埋め戻しについては、サン水道設備の助力を得た。
14. 調査区全体の測量は株式会社四航コンサルタントに委託した。
15. 出土遺物、写真その他図面類の関係資料は香美市文化財事務所（香美市土佐山田町）で保管している。遺跡番号は、18-1-YF である。

本文目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過	10
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	10
第Ⅲ章 調査の概要	13
1 試掘確認調査	14
2 調査の方法	14
第Ⅳ章 調査成果	18
1 基本層序	18
2 遺構と遺物	18
第Ⅴ章 総括	65

挿図目次

第1図 高知県香美市位置図
第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)
第3図 試掘確認調査トレンチ位置図
第4図 調査区位置図
第5図 I区基本層序（東壁）
第6図 I区基本層序（南壁）
第7図 ST1平面・エレベーション図・出土遺物
第8図 ST2平面・エレベーション図・出土遺物
第9図 ST3平面・エレベーション図・出土遺物
第10図 ST5・6・SK60平面・エレベーション図・出土遺物
第11図 ST7平面・エレベーション図・出土遺物
第12図 ST9平面・エレベーション図・出土遺物
第13図 ST10平面・エレベーション図・出土遺物
第14図 ST11平面・エレベーション図・出土遺物
第15図 ST11出土遺物
第16図 ST12平面・エレベーション図・出土遺物
第17図 ST1・2・3・5セクション図
第18図 ST7・9・10・11セクション図
第19図 SB1平面・エレベーション図
第20図 SB1出土遺物
第21図 SB2平面・エレベーション図・出土遺物
第22図 SB3平面・エレベーション図
第23図 SB4平面・エレベーション図・出土遺物

- 第 24 図 SB5 平面・エレベーション図・出土遺物
第 25 図 SB6 平面・エレベーション図・出土遺物
第 26 図 SB7 平面・エレベーション図・出土遺物
第 27 図 SD1 セクション図・出土遺物
第 28 図 SD6・8・9・15・16 出土遺物
第 29 図 SD10・14・16 平面・セクション図・出土遺物
第 30 図 SD11・12・13 セクション図・SD13 出土遺物
第 31 図 SK4・P25・SK32・SK33 平面・セクション図・出土遺物
第 32 図 SK6・7・16 出土遺物
第 33 図 SK31・35・38・49・51 出土遺物
第 34 図 SK52 平面・エレベーション図・出土遺物
第 35 図 P14・15・100・130・424・538 平面・セクション図
第 36 図 ピット出土遺物 1
第 37 図 ピット出土遺物 2
第 38 図 I 区包含層出土遺物 1
第 39 図 I 区包含層出土遺物 2
第 40 図 I 区包含層出土遺物 3
第 41 図 I 区包含層出土遺物 4
第 42 図 I 区包含層出土遺物 5
第 43 図 I 区包含層出土遺物 6
第 44 図 I 区包含層出土遺物 7
第 45 図 I 区包含層出土遺物 8
第 46 図 I 区包含層出土遺物 9 (石製品)
第 47 図 II 区包含層出土遺物

遺物観察表目次

- 遺物観察表 1
遺物観察表 2
遺物観察表 3
遺物観察表 4
遺物観察表 5
遺物観察表 6
遺物観察表 7

写真図版目次

- 図版 1 空中写真（南から）／空中写真（北から）
図版 2 調査前風景（北から）／調査前風景（北から）
図版 3 ST9 検出状況（北東から）／SK11 セクションと遺物出土状態（南から）
図版 4 SD13 と SD15 セクション（南から）／SK32 セクション（南から）
図版 5 SK33 セクション（南から）／SK52 セクション（南から）
図版 6 P538 セクション（南から）／山田エコクラブ発掘調査体験（2019.4.27）
図版 7 片地小学校発掘調査体験（2019.5.8）／楠目小学校発掘調査体験（2019.7.12）
図版 8 香美市生涯学習フォーラム現地見学会の様子（2019.9.28）／I 区完掘状況（北から）
図版 9 ST3 土師器高坏（13）出土状態（南西から）／ST9 弥生土器壺（20）出土状態（南から）／
ST11 セクション（東から）／ST11 弥生土器出土状態（西から）／SD11 セクション（南から）／
SK18 セクション（南から）／SK23・24 セクション（南から）／SK31 土師質土器杯（115）
出土状態（東から）
図版 10 P5 セクション（南から）／P14・15 セクション（南から）／P258 須恵器皿（160）出土状態（南
から）／P427 土師器高坏脚部（167）出土状態（西から）／P585 土師器杯（176）出土状態（西
から）／弥生土器壺（201）出土状態（東から）／縁軸陶器（263）出土状態／弥生土器鉢（214）
出土状態
図版 11 遺構内出土遺物
図版 12 遺構内出土遺物
図版 13 遺構内出土遺物
図版 14 遺構内出土遺物
図版 15 遺構内出土遺物
図版 16 遺構内出土遺物／包含層出土遺物
図版 17 包含層出土遺物
図版 18 包含層出土遺物

付 図 目 次

付図1 伏原遺跡Ⅰ・Ⅱ区遺構平面図 (S = 1/250)

第Ⅰ章 調査の契機と経過

伏原遺跡は、高知県香美市土佐山田町輔目大ツカ西に所在する。

香美市立図書館の新築に際し、図書館建設等検討委員会を開き協議を重ねた結果、周知の埋蔵文化財包蔵地の中に含まれる当該地に香美市立図書館を建設することが決定した。

平成30年1月から2月にかけて試掘確認調査を実施し、その結果を元に発掘調査範囲を確定した。

発掘調査主体は香美市教育委員会となり、発掘調査期間は平成31年2月12日から令和元年9月30日までである。

I区2,570m²、II区118m²を調査した。



第1図 高知県香美市位置図

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

香美市は高知県の中東部に位置し、北は大豊町、本山村と接し、東は徳島県那賀町と隣接する。徳島県と接する剣山国定公園内の三嶺・石立山には国指定特別天然記念物であるニホンカモシカが生息しており、天然記念物のほかにも有形・無形の文化財が多く存在することで知られる。

香美市の面積は537.86km²、人口は25,778人（令和3年10月1日現在）であり、豊かな自然と景観を併せ持つ一方で、高知県公立大学法人高知工科大学が立地する学園都市でもある。

剣山を源とし、流域面積4,860km²を有する物部川は、本流の横山川と支流の上蓮生川が物部町大柄で合流し、高知県最大の穀倉地帯である香長平野を貫流する。

この香長平野の北端部に、東西に長く横たわる長岡台地（古期扇状地）が存在する。伏原遺跡は、物部川と国分川によって形成された長岡台地上に位置している。

歴史に目を向けると、縄文時代早期から人の営みがあったことが認められる。

四国横断自動車道建設に伴い調査が実施された土佐山田町繁藤の剣古屋（かいごや）岩陰遺跡（1）は、縄文時代早期の押型文土器、無文厚手土器などと共に石鎚も出土しており、石材の一部にはサヌカイトが使用されている。また、調査目的を同じくする奥谷南遺跡（2）（南国市）でも草創期から前期にかけての遺物が出土している。

縄文時代後期及び晩期になると、土佐山田町の林田シタノヂ遺跡（3）が現れる。また、東には香北町の中心部、物部川の河岸段丘上に位置する美良布（びらふ）遺跡（4）で縄文時代後期の粗製土器、石鏃、スクレイパーが出土している。

弥生時代になると、高知県最大の集落である田村遺跡（5）（南国市）をはじめとして、物部川流域でも集落が出現するが、香美市には弥生時代前期に該当する遺跡は確認されておらず、中期後半になって龍河洞穴遺跡（6）が出現する。昭和9年に国指定天然記念物及び史跡という二つの分野の指定を受けた、全国的に類を見ない遺跡である。居住空間があるのは現在公開されている本洞出口付近である。甕、壺、獸骨などが出土している。天然記念物としては、石灰岩が長い年月をかけて浸食を受け、様々な形を織りなす鍾乳洞であり、希少な動植物が多く生息する。

弥生時代後期になると、香美市内では伏原遺跡と隣接するひびのき遺跡（7）やひびのきサウジ遺跡（8）が出現する。いずれも、後期後半から古墳時代初頭にかけての集落跡であり、特にひびのきサウジ遺跡は古代（10世紀後半）の一括資料が井戸から出土している。

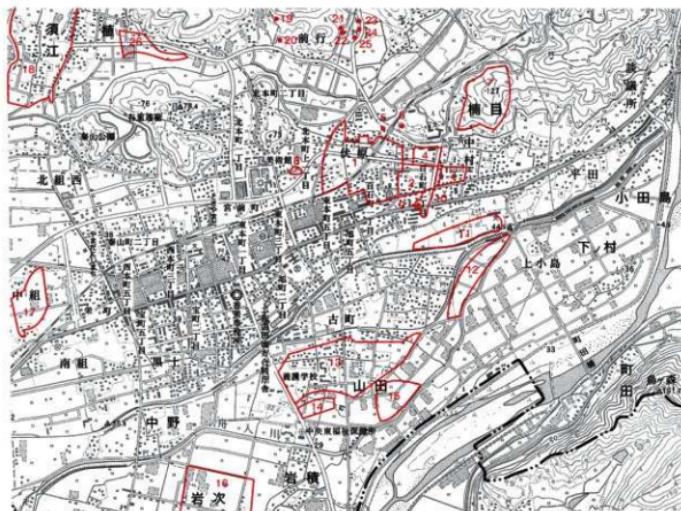
古墳時代には伏原遺跡南東に位置する伏原大塚古墳（9）が、周溝を伴う古墳として出現する。築造は出土遺物から6世紀中葉と目されており、土佐型埴輪とも言われる円筒埴輪が周溝から出土している。

古代になると、須恵器の一大生産地として土佐山田町須江、植地区周辺の山裾に多くの窯跡が展開する。また、物部川左岸に位置する加茂ハイタノクボ遺跡（10）からは、讃岐善通寺と同範する軒丸瓦が出土しており、注目される。

中世は、伏原遺跡周辺に山田氏の居城となった山田城跡（楠目城跡）が存在すること、山裾には城下町の形成が考えられる東市、西市の字名を持つ地区があることから、城下町が形成された場所である。前述したひびのきサウジ遺跡においても、中世の遺構及び遺物を検出しており、家臣団の居館跡と推定されるなど、伏原遺跡周辺における中世の様相も今後考察が必要である。

註

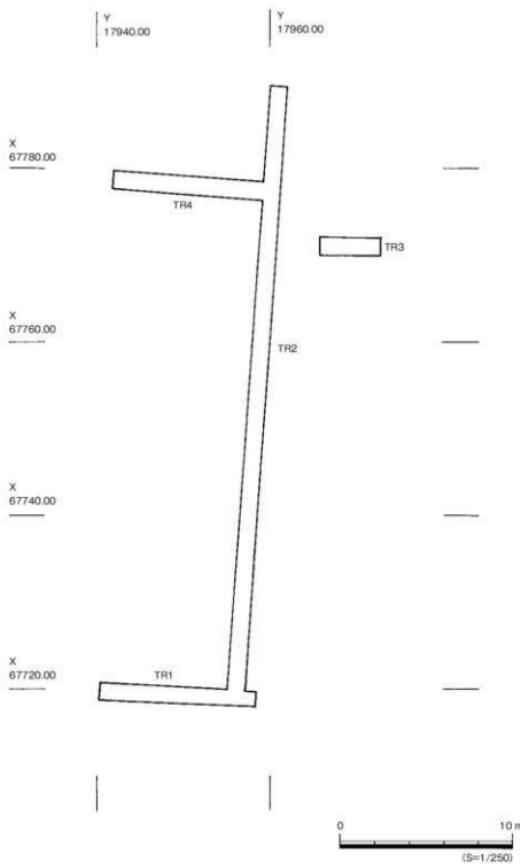
- (1)『飼古屋岩陰遺跡』 高知県教育委員会・日本道路公団 1990
- (2)『奥谷南遺跡Ⅰ』 高知県埋蔵文化財センター 1999
- (3)『林田シタノヂ遺跡Ⅱ』 土佐山田町教育委員会 1993
- (4)『美良布遺跡』 香北町教育委員会 1991
- (5)『田村遺跡』 高知県教育委員会 1981
- (6)『龍河洞穴遺跡』 龍河洞保存会 1974
- (7)『ひびのき遺跡』 土佐山田町教育委員会 1977
- (8)『ひびのきサウジ遺跡』 土佐山田町教育委員会 1990
『ひびのきサウジ遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010
- (9)『伏原大塚古墳』 土佐山田町教育委員会 1993
- (10)『加茂ハイタノクボ遺跡』 土佐山田町教育委員会 2000



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	伏原遺跡	弥生～近世	14	原南遺跡	弥生～近世
2	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	15	高柳遺跡	弥生～中世
3	ひびのき遺跡	弥生・古墳	16	大領遺跡	古墳～中世
4	ひびのき岡ノ神母遺跡		17	山田三ツ又遺跡	古墳～平安
5	鏡野学園古墳	古墳	18	須江上段遺跡	古墳～近世
6	小倉山古墳	古墳	19	溝沢古墳	古墳
7	楠目城跡（山田城跡）	中世	20	桜ヶ谷古墳	古墳
8	長谷川丸遺跡	古墳～平安	21	前行山1号墳	古墳
9	伏原大塚古墳	古墳	22	前行山2号墳	古墳
10	大塚遺跡	弥生・古墳・中世	23	大元神社北古墳	古墳
11	楠目遺跡	弥生～近世	24	大元神社古墳	古墳
12	稲荷前遺跡	弥生～近世	25	神母古墳	古墳
13	原遺跡	弥生～近世	26	西クレドリ遺跡	弥生～近世

第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

第Ⅲ章 調査の概要



第3図 試掘確認調査 トレンチ位置図

1. 試掘確認調査

調査対象区の試掘確認調査は、平成 30 年 1 月 15 日から 2 月 6 日にかけて実施した。

試掘確認調査に際して、逆 L 字状にトレンチを設定し、重機で客土を掘削したのち、人力に切り替えて遺構の検出と遺物の確認を行った。調査途中で、西への広がりも想定されたため、TR4 を設定し確認を行った。遺構は検出にとどめ、調査終了後は検出面にシートをかけて保護し、埋め戻した。TR2 内で検出した、南北方向に走る溝跡は本発掘調査により SD8 であることがのちに確認された。

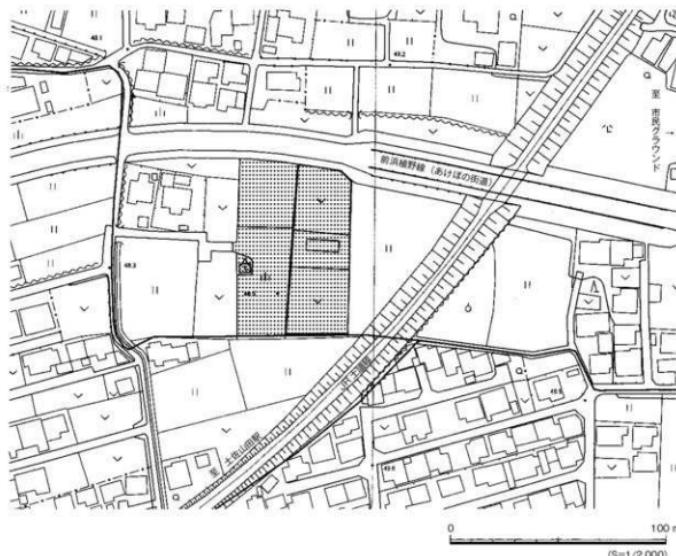
調査の結果、確認した範囲の東西方向及び南北方向で遺構がほぼ全面に認められたこと、表下約 40cm を掘削した位置で遺構を検出することを確認した。

TR1 ~ 4 では、弥生時代から古代にかけての遺物包含層が存在し、弥生土器片や須恵器片、古代の土師器等が出土しており、調査対象区内に遺跡の広がりがあることが想定された。これらの状況を踏まえて協議した結果、記録保存を目的とした本発掘調査が必要と判断されたため、実施することとなった。

2. 調査の方法

調査対象地は、I 区と II 区を設定した。II 区は、香美市消防本部が防火水槽を設置する位置に相当する。

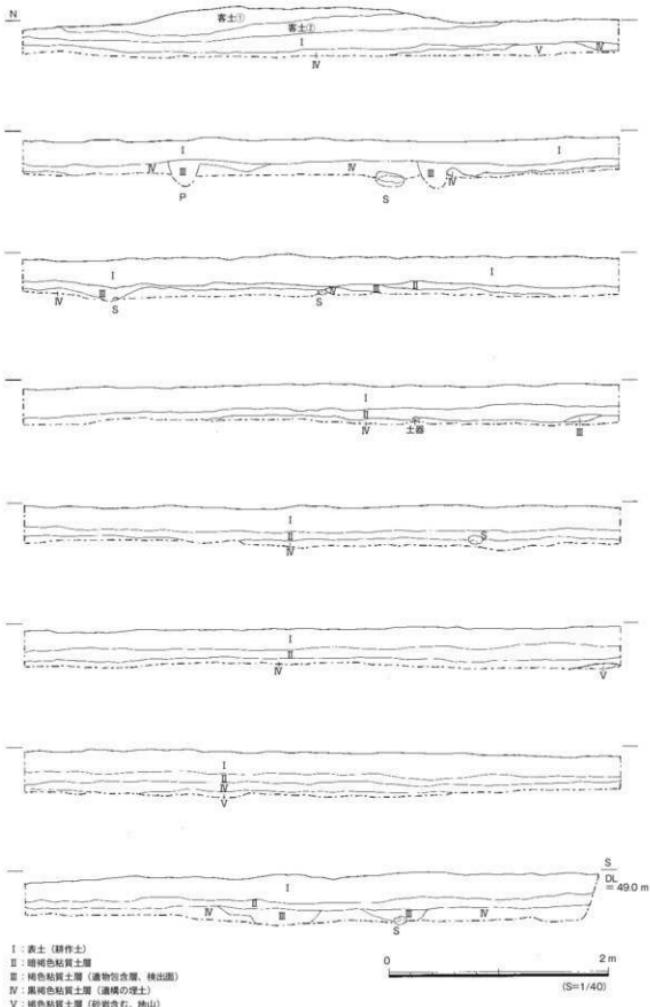
I 区、II 区共に公共座標によって 4 メートル四方のメッシュを設定し、グリッド杭を打った。遺構及び層序の実測は 20 分の 1 緩尺を基本とし、必要に応じて縮尺を変えた。



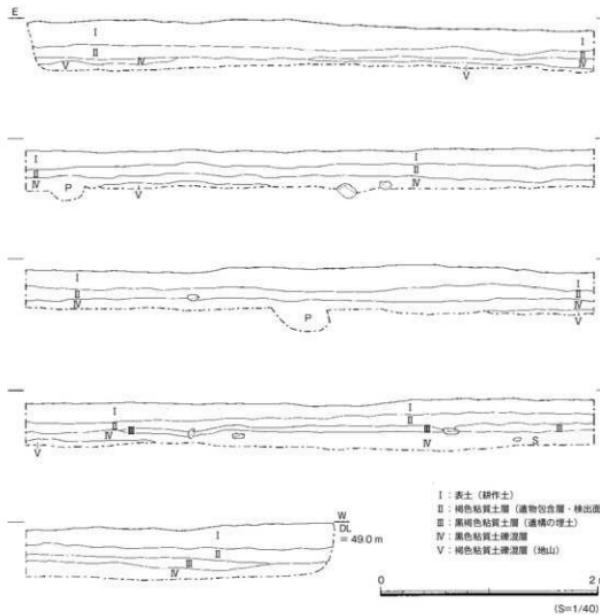
第 4 図 調査区位図



付図1 伏原遺跡I・II区遺構平面図 (S=1/250)



第5図 I区基本層序（東壁）



第6図 I区基本層序（南壁）

第IV章 調査成果

1. 基本層序

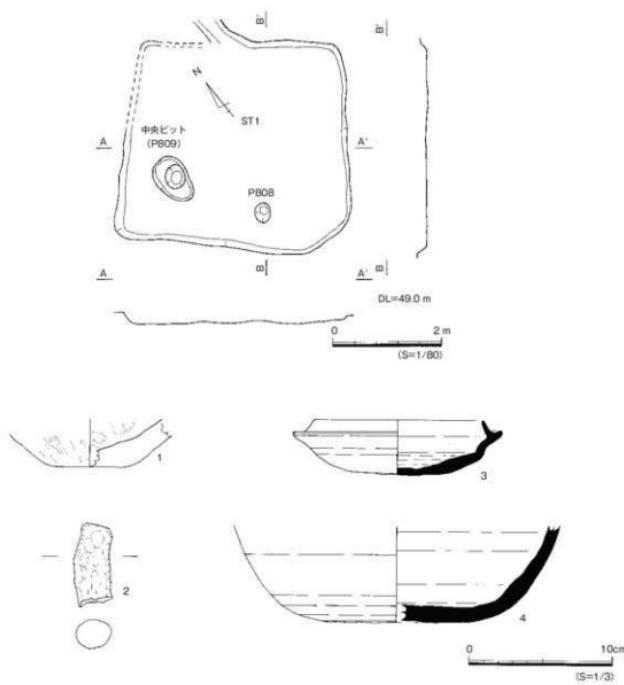
調査区東壁及び南壁の層準を示す。調査区全体を通してほぼ水平に堆積しており、遺物包含層からは弥生土器、古代及び中世の遺物が出土している。近代の溝も存在し、現代に至るまで畑地として使用されていた。

2. 遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

ST1（第7図）

調査区北東にあり、ST2 及び ST3 と一緒に検出した。隅丸方形を呈し、一辺約 4.1 m である。埋土は



第7図 ST1 平面・エレベーション図・出土遺物

黒褐色粘質土で、深さは10cm前後を図る。床面は平坦で、楕円形プランを呈する中央ピットが西寄りに位置する。

南北に伸びるSD2に切られており、SD2はST1内の南端でSK6（ハンダ土坑）に接する。SK6はST1の遺構埋土上で検出されている。

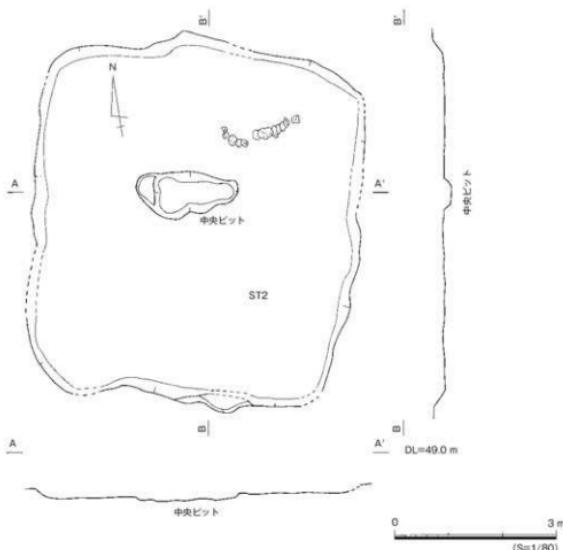
埋土は、I層が黒褐色粘質土層の遺物包含層、II層は暗褐色粘質土縛混層である。

出土遺物は弥生土器444点、細片509点、須恵器16点、製塙土器4点が見られ、このうち弥生土器2点（1・2）、須恵器2点（3・4）が図示できた。

出土遺物（第7図）

弥生土器

1は壺の底部である。底部近くの外間に縦ハケ調整がみられる。内面はヘラケズリで調整する。2は



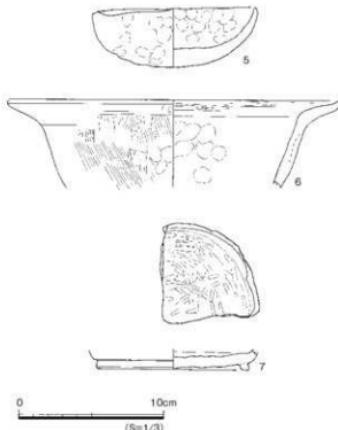
支脚である。外面に指頭圧痕が顯著にみられる。
須恵器

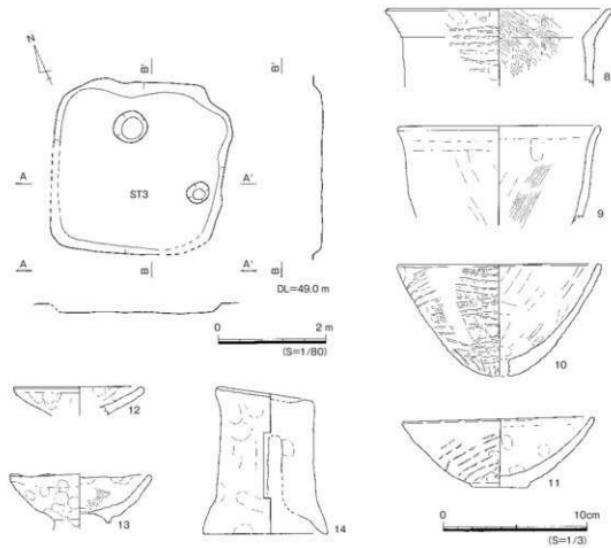
3は杯身である。底部外面に回転ヘラ切り痕が見られる。胴部はナデ調整を施す。古代後期(7世紀前半)の製品である可能性がある。4は鉢である。外面は回転ヘラケズリで調整し、内面はナデ調整がみられる。

ST2 (第8図)

調査区北にあり、すぐ東にST1がある。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺約6.6mである。埋土は黒色粘質土と黒褐色粘質土の2層からなり、遺構内北東には焼土の集中を確認している。東西に走るSD19との時期差は不明である。SD4との時期差は、切合を確認したところST2がSD4を切っており、SD4が機能した時期はST2より前であることが分かった。梢円形を呈する中央ピットが存在する。

第8図 ST2 平面・エレベーション図・出土遺物





第9図 ST3 平面・エレベーション図・出土遺物

埋土は、I層が黒色粘質土層、II層が黒褐色粘質土層であり、いずれも遺物包含層である。ST2内北東付近の一部に、褐色土層が堆積しており、上面に焼土が集中して見られたことから、窯跡であると考えられる。

出土遺物は弥生土器298点、細片81点、須恵器38点、製塙土器5点が見られ、このうち弥生土器2点(5・6)、土師器1点(7)が図示できた。

出土遺物(第8図)

弥生土器

5は椀である。内外面に指頭圧痕が顕著にみられる。6は鉢である。口唇部にナデ、外面口縁部から胸部にかけて緩方向のハケ調整を施す。内面には指頭圧痕がみられる。

土師器

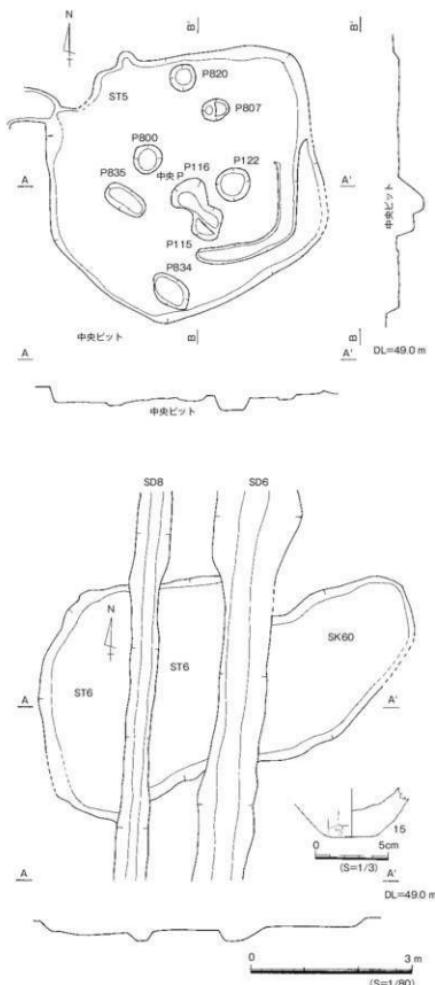
7は底部のみである。輪高台で、内面全体にヘラミガキを施す。器形は不明である。

ST3(第9図)

ST2のすぐ南にある。平面プランは隅丸方形を呈し、一辺約3.1mである。

遺構内の埋土は2層に分かれており、埋土は、I層が黒色粘質土層、II層が暗褐色粘質土層で、いずれも遺物包含層である。

小型の竪穴建物跡だが出土遺物が多い。土器はほとんどが遺構埋土から出土しており、弥生時代後



第10図 ST5・6・SK60平面・エレベーション図・出土遺物

期終末の特徴を持つものがほとんどである。

出土遺物は弥生土器 527 点、細片 185 点である。須恵器は出土していない。

二重口縁の壺と考えられる口縁部も出土しているが、残存状態が悪く、図示し得なかった。

出土遺物（第9図）

弥生土器

8 は壺である。口唇部には指頭圧痕がみられる。胴部外面は横方向のタタキ目が顕著である。内面はハケ調整を施す。9 は鉢である。口縁部は内外面とも横方向ナデ調整がみられ、胴部内面には縦方向ハケ調整を施す。11 も鉢で、外面に右上がりタタキ目が施される。内面は指頭圧痕が顕著である。12 も鉢で口唇部にナデ調整がみられる。

10 は瓶である。胴部外面は横方向タタキ目がみられ、内面は右上がりのナデ調整を施す。

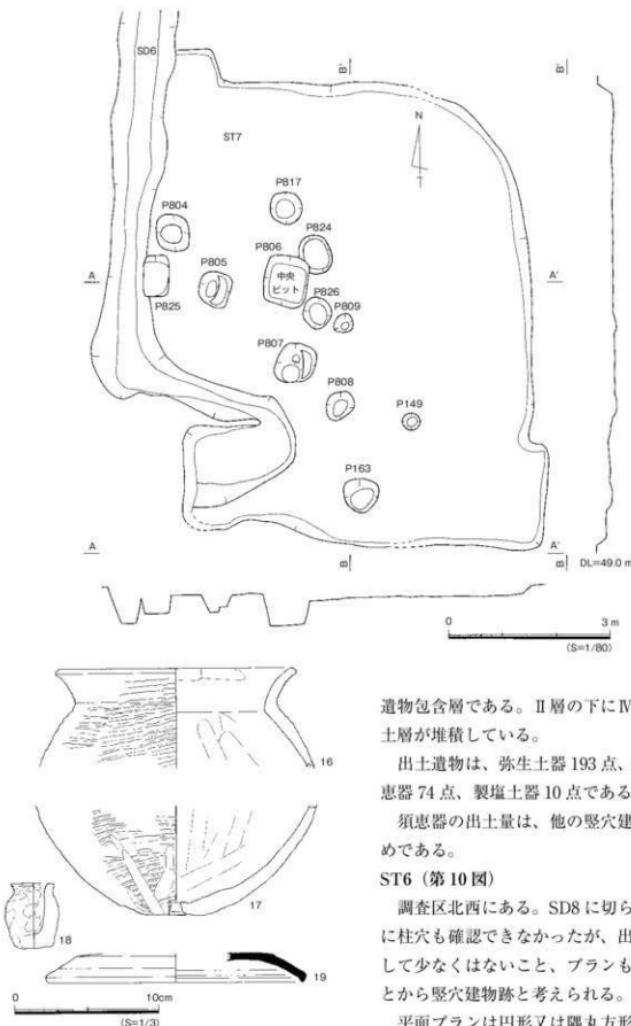
13 は高壺である。外面に粘土帯を貼り重ねた痕が見られる。

14 は支脚である。外面に指頭圧痕が顕著に見られる。

ST5（第10図）

ST1 の南にある。平面プランは五角形を呈し、一辺約 4.9m である。住居内の北側に長方形のベッド状遺構と考えられる形状を確認している。中央ピットは横に長く、床面から約 50cm の深さがある。

埋土は、I 層が黒褐色粘質土層、II 層が黄色の小礫を含む黒色粘質土層で、いずれも遺物包含層である。III 層は、遺構内ピットの埋土であり、



第 11 図 ST7 平面・エレベーション図・出土遺物

遺物包含層である。II 層の下に IV 層の暗褐色粘質土層が堆積している。

出土遺物は、弥生土器 193 点、細片 379 点、須恵器 74 点、製塙土器 10 点である。

須恵器の出土量は、他の堅穴建物跡と比べて多めである。

ST6 (第 10 図)

調査区北西にある。SD8 に切られており、床面に柱穴も確認できなかったが、出土遺物の量は決して少なくはないこと、プランも明確であったことから堅穴建物跡と考えられる。

平面プランは円形又は隅丸方形を呈する。出土遺物は弥生土器 427 点、細片 523 点、須恵器 6 点である。

出土遺物（第10図）

弥生土器

15は鉢である。底部のみ残存する。

SK60（第10図）

検出した当初は竪穴建物跡の可能性があると考えていたが、形状等や遺物出土状況から竪穴建物跡ではなく土坑であると考え、変更した。

ST6との切合部分を探したが、見つからなかった。SD6で切られている可能性が高い。

ST7（第11図）

一辺約8.4mの隅丸方形を呈する。SD6に切られているため南側が不明瞭だが、方形の中央ピットが存在する。長辺90cm、短辺80cmである。

埋土は、I層が遺物包含層の黒褐色粘質土層で、II層は暗褐色粘質土疊混層である。III層は遺構床面の直上に堆積する。IV層は黒褐色粘質土層で、橙色土を含む遺物包含層である。出土遺物は、弥生土器321点、細片219点、土師器6点、須恵器17点、製塙土器3点である。

出土遺物（第11図）

弥生土器

16は甕である。口唇部を面取りしている。胴部外面は横方向タタキ目がみられ、内面は縦方向ナデ調整が顕著である。17は瓶である。外面に横方向のタタキ目が残る。内面縦方向にナデを施す。18はミニチュア土器である。内外面とも、指頭圧痕が顕著にみられる。

須恵器

19は杯蓋である。焼け歪んでおり、ツマミは欠損している。ナデ調整を施す。

ST9（第12図）

調査区東にある。平面プランはほぼ隅丸方形で、一辺約5.2mである。遺構埋土からは弥生時代後期終末の土器片が多く出土している。ST9が廃棄された後、ほぼ重なるようにSB5が建てられている。埋土は、I層が灰黄褐色粘質土層、II層が黒褐色粘質土層でIII層も黒褐色粘質土層である。黄褐色土の塊が混じる。IV層は暗褐色粘質土疊混層である。床面直上に堆積する。

出土遺物は弥生土器209点、細片165点、須恵器2点が出土している。

出土遺物（第12図）

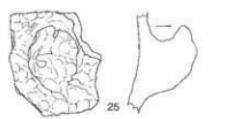
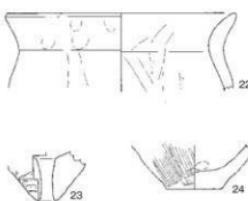
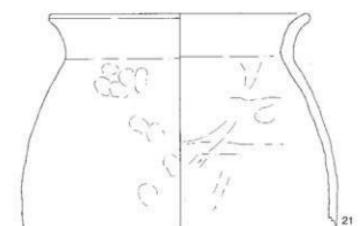
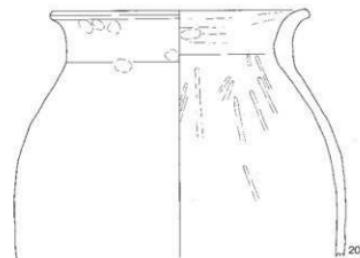
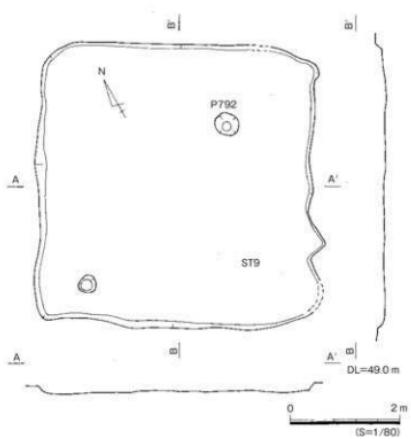
弥生土器

20・21・22は甕である。20は口縁部に横方向のナデ調整がみられる。胴部内面には縦方向のナデ調整を施す。21は口縁部外面にナデ調整がみられ、胴部内面には縦方向にヘラナデを施す。22は口縁部に横方向のナデ調整がみられる。外面にはハケナデ調整を施し、煤が付着する。

23は瓶である。外面横方向にタタキ目が残る。24は鉢である。外面にハケナデ調整がみられる。25は取っ手である。指頭圧痕が顕著にみられ内面には荒いケズリ調整を施す。

ST10（第13図）

調査区中央、やや南よりにある。一辺約4.2mで平面プランは隅丸方形を呈すると考えられるが、東側がやや不明瞭である。底面は中央に向かってすり鉢状に緩い傾斜がついている。遺構内の北には焼土がまとまっており、石を人為的に組んでいる形跡が見られたことから、炉跡と考えられる。遺構埋土からは弥生時代後期後半の土器片が多く出土している。



0
10cm
(S=1/3)

第12図 ST9平面・エレベーション図・出土遺物

埋土は、I層が黒褐色粘質土層の遺物包含層である。II層が黒色粘質土層で、黄色土を含む。III層が黒褐色粘質土層で、II層とIII層が遺構の埋土である。

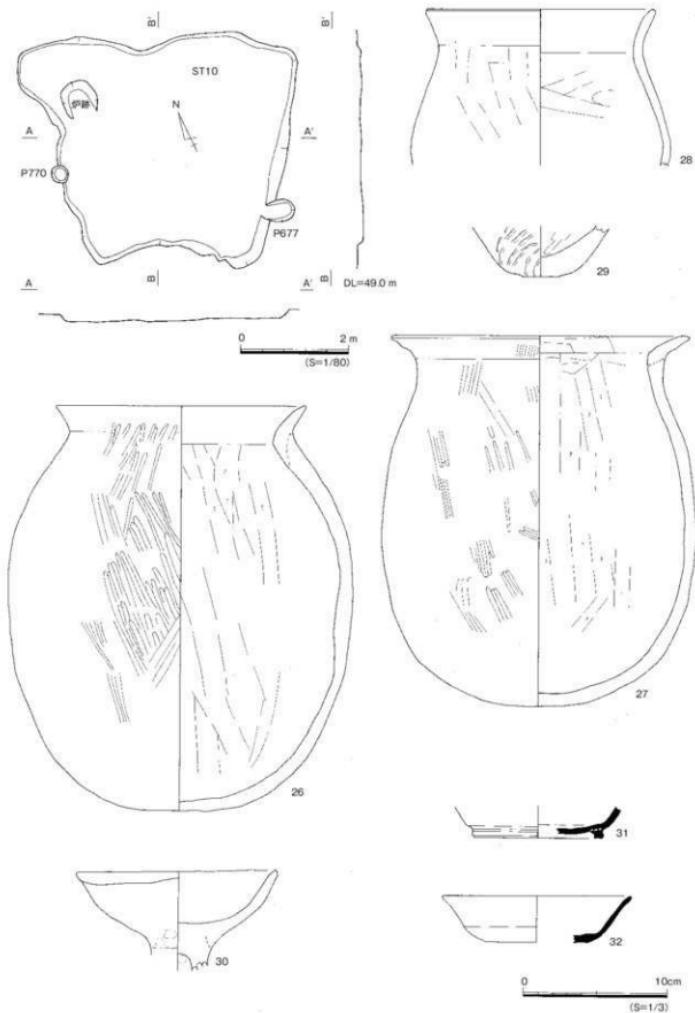
出土遺物は弥生土器56点、細片51点、土師器1点、須恵器4点である。

出土遺物（第13図）

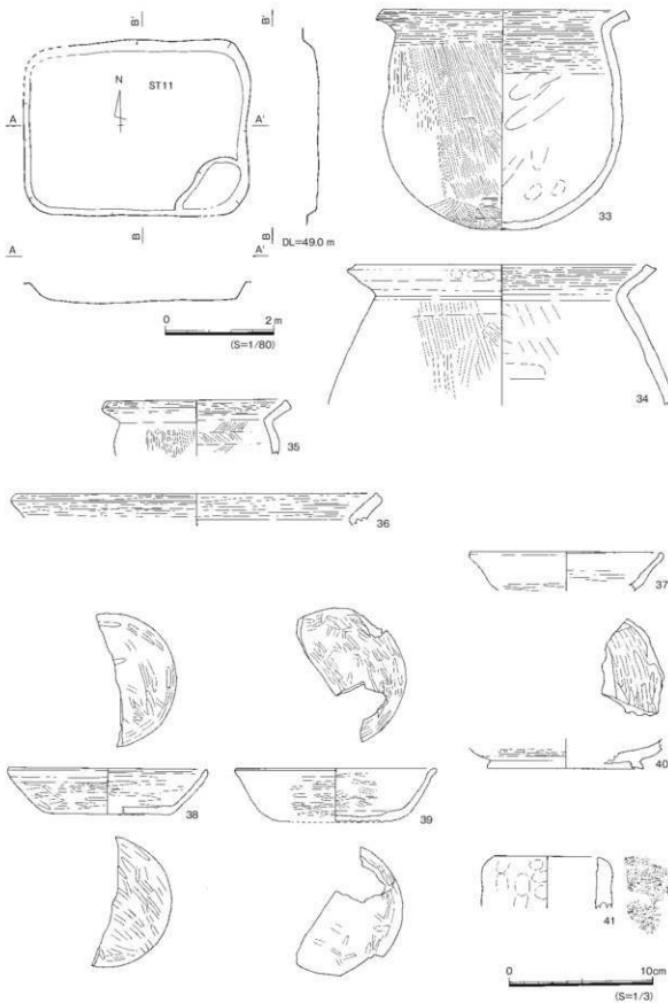
弥生土器

26・27・28・29は壺である。26は口縁部から底部にかけて約1/2が残存する。外面には口縁部から底部にかけてヘラミガキが施される。内面は縦方向に強いナデ調整がみられる。27も、26とはほぼ同じ調整が施されており、1/2が残存する。炉跡から出土した土器片が同一個体であることを確認した。

28は外面胴部に縦方向のナデ調整を施し、内面には横方向のナデ調整がみられる。29は底部のみ残存する。外面に斜め方向



第13図 ST10平面・エレベーション図・出土遺物



第14図 ST11平面・エレベーション図・出土遺物

のタタキ目が残る。

土師器

30は高坏である。脚部にかけ指頭圧痕が見られる。磨耗が激しく、調整の詳細は不明である。

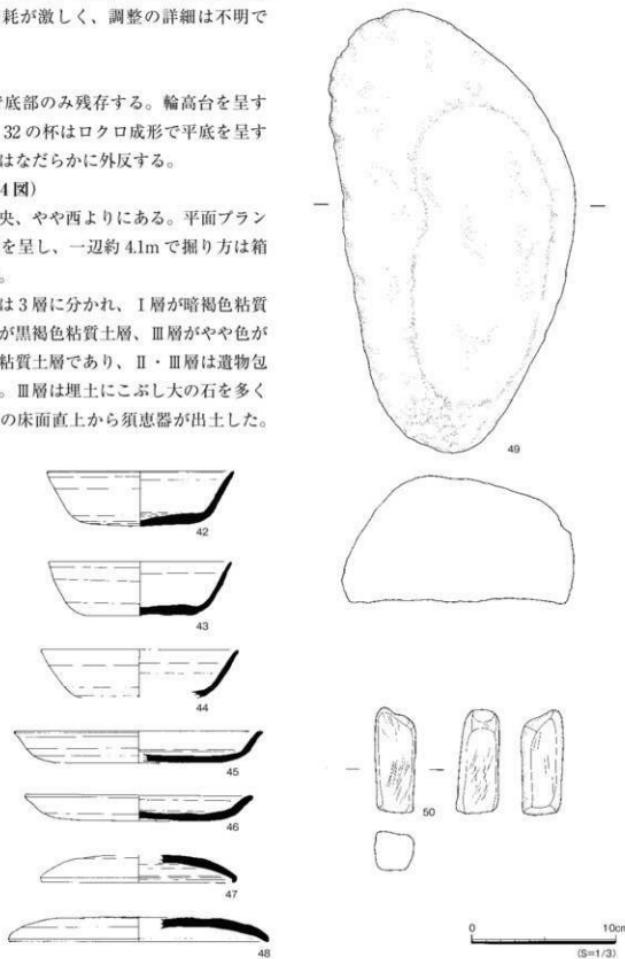
須恵器

31は杯で底部のみ残存する。輪高台を呈する。同じく32の杯はロクロ成形で平底を呈する。口唇部はなだらかに外反する。

ST11(第14図)

調査区中央、やや西よりにある。平面プランは隅丸方形を呈し、一辺約4.1mで掘り方は箱堀りに近い。

遺構埋土は3層に分かれ、I層が暗褐色粘質土層、II層が黒褐色粘質土層、III層がやや色が黒い黒褐色粘質土層であり、II・III層は遺物包含層である。III層は埋土にこぶし大の石を多く含む。遺構の床面直上から須恵器が出土した。



第15図 ST11出土遺物

弥生土器 175 点、細片 114 点、土師器 11 点、須恵器 20 点、製塙土器 5 点である。

出土遺物（第 14・15 図）

弥生土器

33～36 は甕である。33 は外面縦方向にハケ調整がみられる。

底部は横方向のハケ調整が密に施される。

34 は外面にハケ調整を施す。口縁部は横方向にナデ調整がみられる。35 は口縁端部を面取りしている。

土師器

37～40 は杯である。37 は回転ナデ調整を施し、内面には荒いヘラナデが見られる。

38 は底部ヘラ切痕がみられる。底部は内面外面共にヘラミガキを施す。39 は内外面横方向にヘラミガキを施す。一部剥離している。40 は底部のみ残存する。外面黒色で、内面は赤くヘラミガキがみられる。

製塙土器

41 は内面に布目痕がみられる。外面は指頭圧痕が顕著である。

須恵器

42～44 は杯である。42 は底部外面に回転ヘラ切痕が施され、内外面にナデ調整がみられる。

43 は底部ヘラ切痕がみられ、内外面に強いナデ調整を施す。44 は内外面ともナデ調整が認められる。

45・46 は皿である。45 は内外面ともナデ調整を施す。46 も同様である。47・48 は杯蓋である。内外面にナデ調整がみられる。47 の外面には自然釉がかかる。48 は焼成不良である。

49・50 は石製品である。49 は炉跡と考えられる焼土を含む箇所から出土した砂岩で、上面は扁平になつておらず、裏面は黒く煤ける。50 は砥石で、使用により凹みができている。

ST12（第 16 図）

調査区北西端に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長辺 4m、短辺 3.5 m で SD6 に切られている。深さは 28～33cm を測る。

出土遺物は弥生土器 81 点、細片 75 点、須恵器 4 点、土師器 5 点、土師質土器 2 点である。

出土遺物（第 16 図）

弥生土器

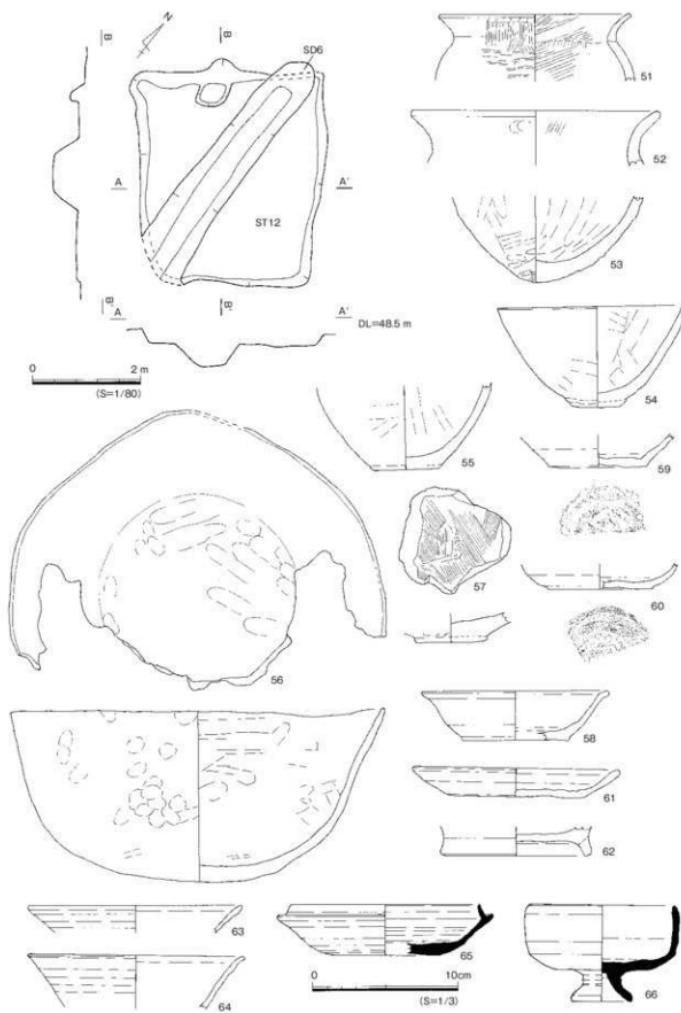
51・52・53 は甕である。51 は胴部外面の横方向にタタキ成形を施した後、縦方向にハケでナデ消している。52 は口縁部横ナデ、内外面に指頭圧痕が認められる。53 は底部外面にタタキ目があり尖底を呈する。54～57 は鉢である。54 は内面に縦方向のヘラナデ調整を施し、底部は貼り付けている。56 は深広鉢と考えられる。内面にナデ調整がみられる。57 は内面にハケ調整を施す。底部は貼り付けている。

土師器

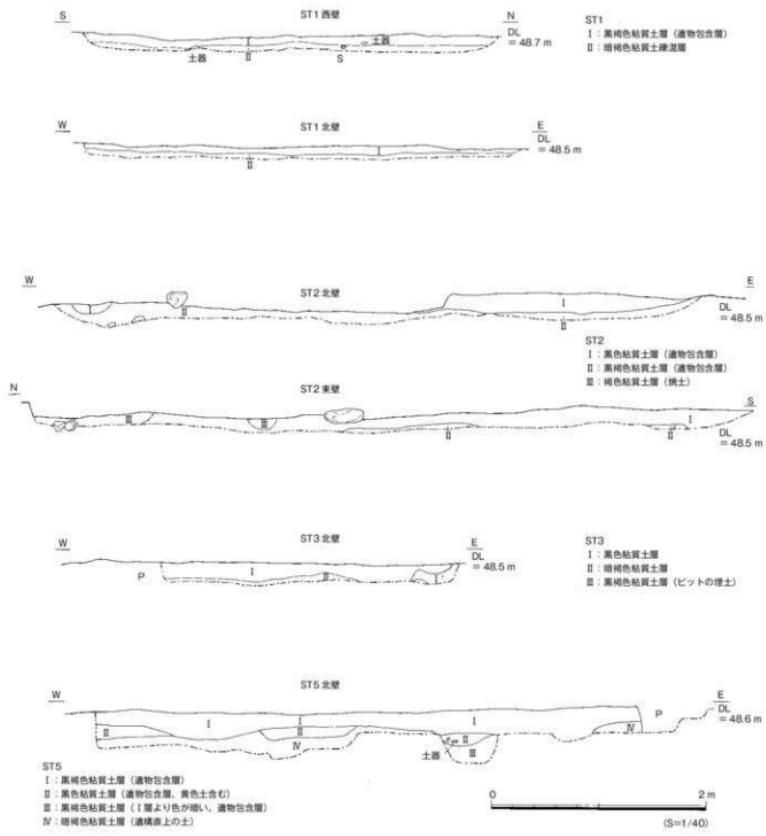
58～59 は杯である。58 は内面に回転ナデ調整がみられる。底部は回転ヘラ切り痕がある。59 は内外面とも横方向のナデを施す。底部は回転ヘラ切りをしたのち、静止してヘラ切りした可能性がある。

須恵器

65 の杯身と 66 の高坏が出土している。65 は底部に回転ヘラ切り痕が認められる。66 の高坏は自然釉が認められる。



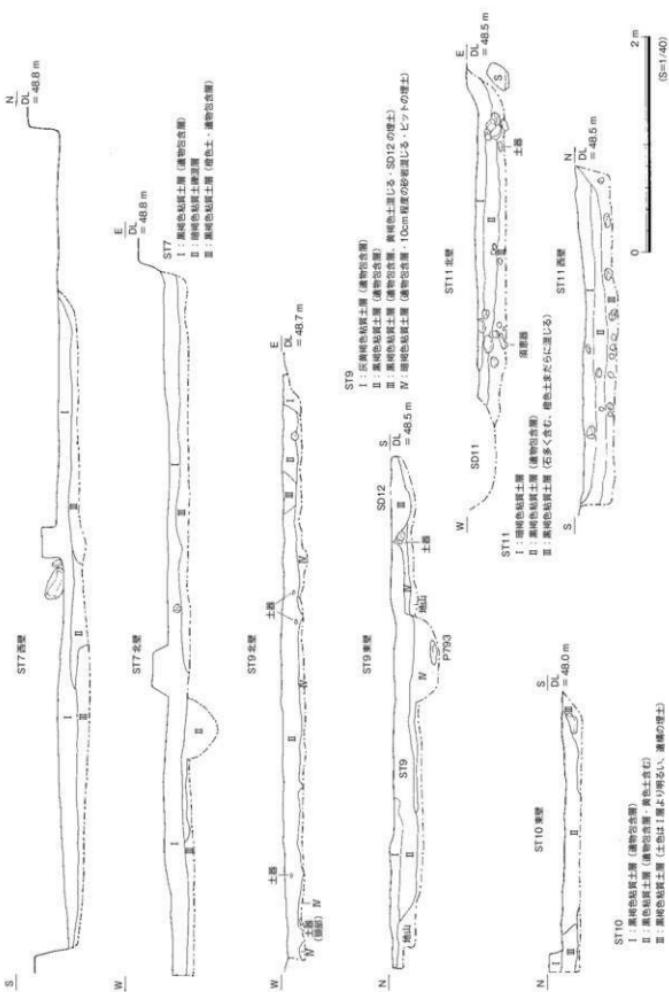
第16図 ST12平面・エレベーション図・出土遺物



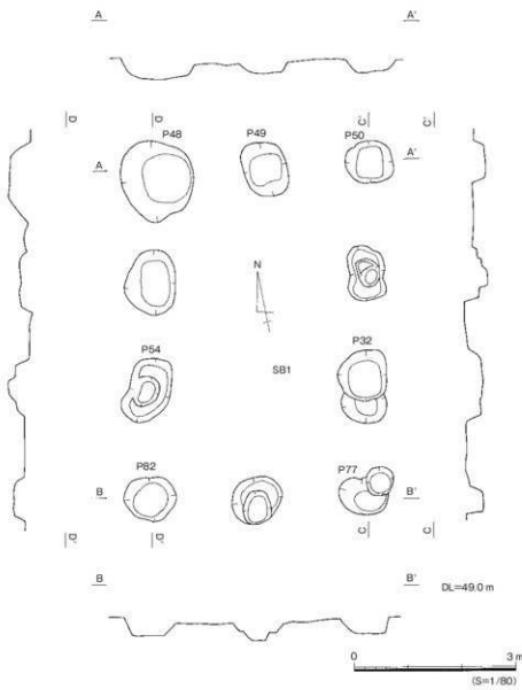
第 17 図 ST1・2・3・5 セクション図

土師質土器

63・64 の 2 点が出土する。いずれも器壁は薄く、体部のみ残存している。回転ロクロ成形の在地産である。



第18図 ST7・9・10・11セクション図



第19図 SB1平面・エレベーション図

(2) 掘立柱建物跡

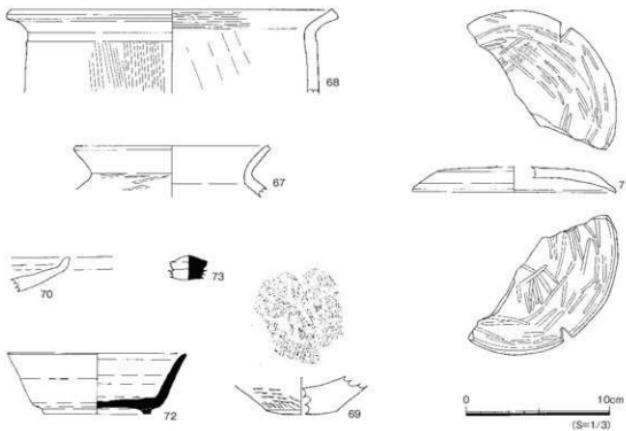
SB1（第19図）

調査区北で検出した梁間2間(4.0m)、桁行3間(6.0m)の南北棟建物(N-10°-E)である。柱間寸法は梁間(東西)が2m、桁行(南北)が同じく2mで、柱穴は長径74cm~1.4m、短径32~76cmの円形又は隅丸方形で、埋土は暗褐色粘質土であった。出土遺物は弥生土器片483点、土師器71点、須恵器52点が見られ、製塙土器や須恵器高坏の脚部が混じる。北東隅の柱穴からは古代の土師器が出士している。

出土遺物（第20図）

弥生土器

67・68・69は甕である。67はP54から出土し、外面頸部から胴部にかけてタタキを施す。68も同じくP54からの出土で、外面ハケ調整、内面は縦方向のハケナデを施している。69は底部のみの出土で、内面にハケ調整を施す。



第20図 SB1出土遺物

土師器

70は盤でP50から出土する。口唇部と外面に煤が付着している。内面横方向ナデ調整が見られる。71の杯蓋は内外面にヘラミガキを施す。形状から8世紀中葉の製品と考えられる。

須恵器

72の杯、73の蓋の摘み部分を図示した。

72はP48から出土し、底部に輪高台が見られる。焼け歪みがある。73は形状から、8世紀中葉の製品と考えられる。

SB2（第21図）

調査区北、SB1の東で検出した、梁間2間（3.2m）、桁行3間（4.8m）の南北棟建物（N-3°-E）である。柱間寸法は梁間（東西）が1.6m、桁行（南北）が同じく1.6mで、柱穴は長径56～80cm、短径50～60cmの円形又は隅丸方形である。埋土は褐色土で黄褐色土がまだらに混じる。出土遺物は弥生土器203点、土師器9点、須恵器14点が見られ、製塩土器などが混じる。

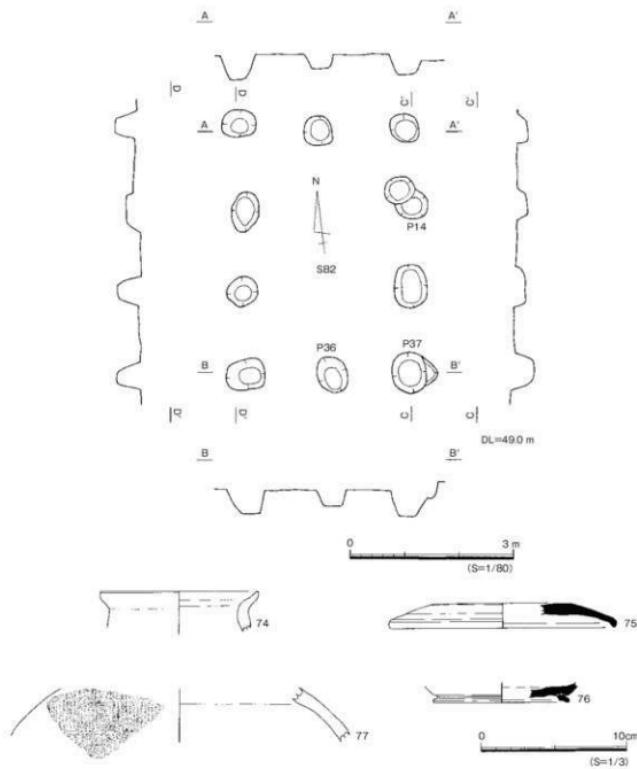
P14

SB2を構成する柱穴の一つである。黒褐色粘質土の単純1層で、埋土には炭を含む。直径60cmの円形を呈し、弥生土器33点、須恵器3点が出土している。

出土遺物（第21図）

弥生土器

74は甕である。内外面の摩耗が激しく、調整は不明である。



第21図 SB2平面・エレベーション図・出土遺物

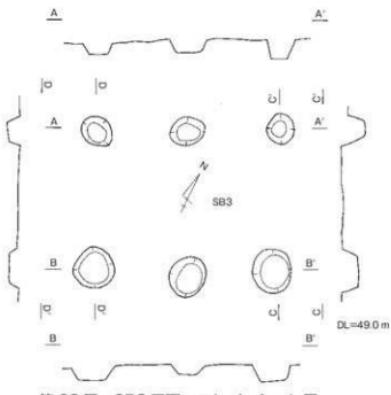
須恵器

75は蓋である。内外面ともナデ調整を施す。焼成不良である。76は底部のみで、輪高台を呈する。口クロ成形でやや薄く硬質である。皿と考えられる。

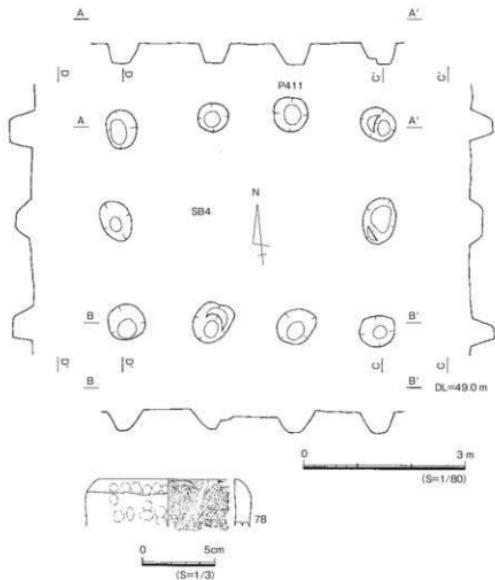
SB3（第22図）

調査区中央付近で検出した梁間1間（2.6 m）、桁行2間（3.4 m）の東西棟建物（N-67°-E）である。柱間寸法は、梁間（東西）が2.6 m、桁行（南北）が1.6～1.8 mで、柱穴は長径56～80cm、短径50～60cmの円形又は梢円形で、埋土は黒色粘質土（黒ボク）である。

出土遺物は弥生土器481点、須恵器5点、製塙土器2点が見られる。



第22図 SB3 平面・エレベーション図



第23図 SB4 平面・エレベーション図・出土遺物

SB4 (第23図)

調査区ほぼ中央、SB3の南西で検出した梁間2間(3.6m)、桁行3間(5m)の東西棟建物(N-85°-W)である。柱間寸法は、梁間(東西)1.6~2m、桁行(南北)は18mで、柱穴は長径56~88cm、短径52~64cmの円形又は梢円形である。埋土は黒色粘質土(黒ボク)、黒褐色粘質土である。出土遺物は弥生土器83点、須恵器3点、土師器3点、製塙土器1点である。

P411

SB4を構成する柱穴の一つである。直径64cmの隅丸方形に近いプランで、深さ36cmを測り、弥生土器4点が出土している。

出土遺物(第23図)

製塙土器

78は外面に指頭圧痕、内面には布目が明瞭に残る。口縁部をやや内傾させる。

SB5 (第24図)

調査区ほぼ中央、SB4すぐ東で検出した梁間2間(3.6m)、桁行3間(5m)の東西棟建物(N-43°-W)である。柱間寸法は、梁間(東西)2~2.2m、桁行(南北)1.8~2.0mで、柱穴は長径56~76cm、短径52~72cmの円形又は梢円形である。埋土は黒色粘質土層(黒ボク)、黒褐色粘質土である。出土遺物は弥生土器162点、須恵器4点、製塙土器2点である。

出土遺物（第24図）

弥生土器

79は甕である。外面に指頭圧痕を施した後、ハケ成形をする。内面は横方向のハケ調整が見られる。80も甕で、底部のみ出土しており、摩耗が激しく調整痕の確認が難しかった。いずれもP433から出土している。

81は胴部外面にタタキ成形を施す。底部は平底を呈する。P790から出土する。

82は高坏でP470から出土した。脚部外面をタタキ成形した後、上からナデ消している。内面にハケ調整が見られる。上部には指頭圧痕を施す。

SB6（第25図）

調査区南東寄り、SB5の南で検出した梁間2間、桁行3間の南北棟建物（N-3°-E）である。柱間寸法は、梁間（東西）が1.6～1.8m、桁行（南北）と同じく1.6～1.8mである。

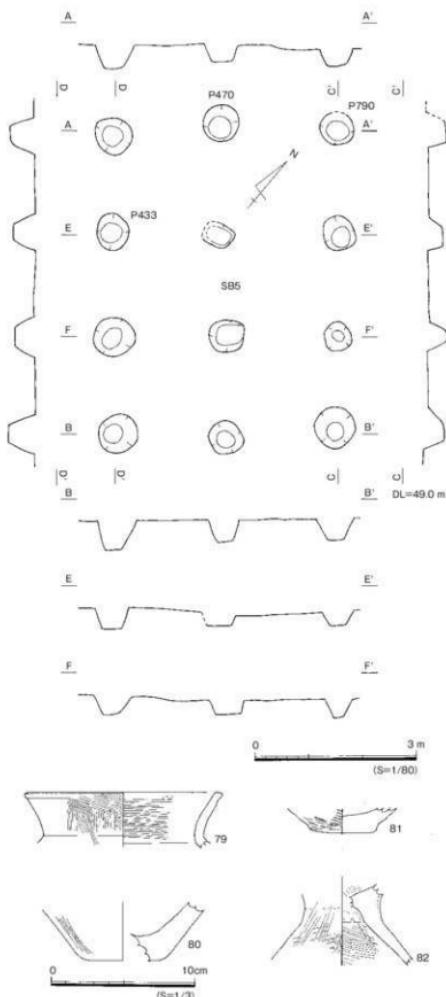
柱穴は長径76cm～1.0m、短径70～80cmの円形又は椭円形である。埋土は黒色粘質土（黒ボク）、黒褐色粘質土である。出土遺物は弥生土器62点、土師器12点、須恵器9点、製塩土器2点である。

P503

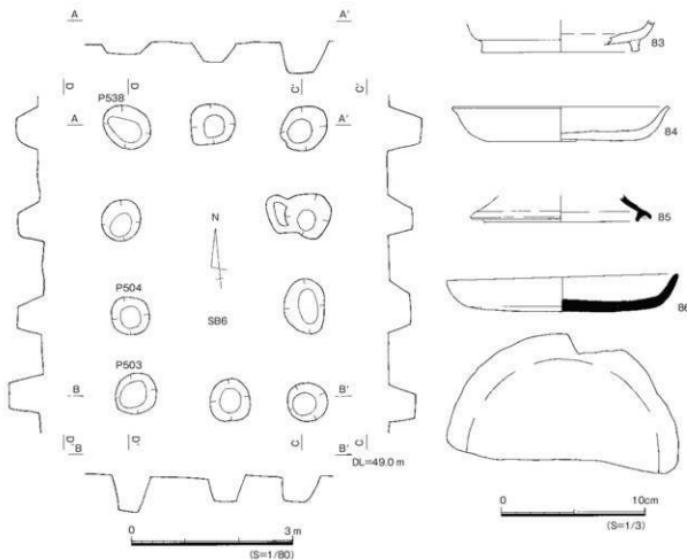
SB6を構成する柱穴の一つである。

P504

SB6を構成する柱穴の一つで、直径76cmの円形を呈する。



第24図 SB5 平面・エレベーション図・出土遺物



第25図 SB6平面・エレベーション図・出土遺物

P538

SB6の柱穴である。長径 92cm、短径 76cm の梢円形を呈する。深さは 55cm で弥生土器 3 点、土師器 2 点が出土している。3 層に分かれ、弥生土器は I・II 層から出土する。

出土遺物（第25図）

土師器

83 は杯である。P538 から出土し輪高台を呈する。底部外面に煤が付着する。内面にナデ調整を施す。

84 は皿である。底部に回転ヘラ切り痕が認められる。

P503 から出土する。

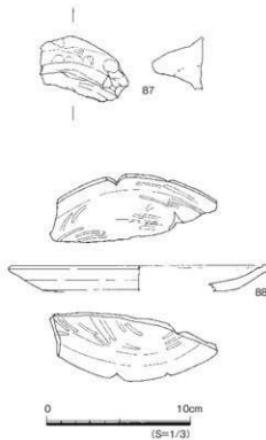
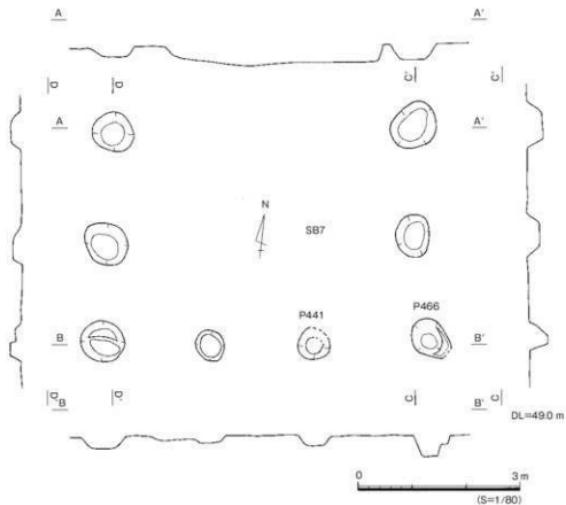
須恵器

85 は蓋である。薄手で、内面にナデ調整を施す。やや歪みが見られ、蓋上面には溶着痕が残る。86 は皿である。外面に薄く火櫻が見られる。いずれも、P504 から出土する。

SB7（第26図）

調査区中央、SB4 の西で検出した梁間 2 間 (4.0 m)、桁行 3 間 (6.0 m) の東西棟建物 (N-83°-E) である。柱間寸法は、梁間（東西）が 2.0 m、桁行（南北）が 1.8 ~ 2.0 m である。

柱穴は長径 60 ~ 96cm、短径 52 ~ 76cm の円形又は梢円形である。埋土は黒色粘質土（黒ボク）、黒



第26図 SB7 平面・エレベーション図・出土遺物

褐色粘質土である。出土遺物は弥生土器 56 点、土師器 3 点、須恵器 2 点、製塩土器 3 点である。このうち、土師器の移動式竈と皿を図示した。

P441

SB7 を構成する柱穴の一つである。直径 64cm、深さ 36cm を測る。複数の柱穴に切られているが、やや梢円を呈すると考えられる。弥生土器 6 点が出土する。

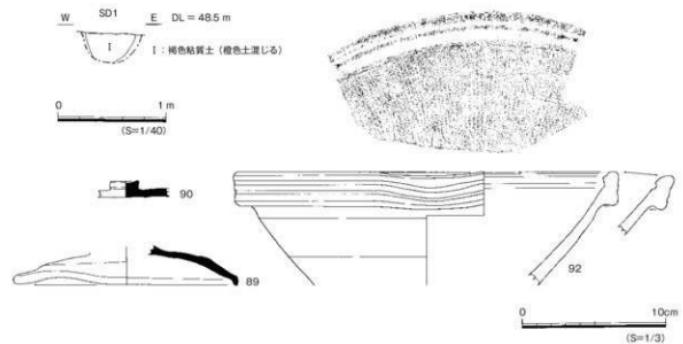
P466

SB7 を構成する柱穴の一つである。後世の柱穴に切られているが、梢円を呈すると考えられる。長径 80cm、短径 64cm を測る。弥生土器 14 点、細片 2 点、土師器 1 点、須恵器 1 点、製塩土器 3 点が出土する。

出土遺物（第 26 図）

土師器

87 は移動式竈である。P441 から出土した。内面に薄く煤が付着している。外面は指頭圧



痕、内面横方向ナデ調整を施す。底の部分と考えられる。88は皿である。内外面ともヘラミガキが顕著に見られる。

(3) 溝跡

SD1 (第27図)

調査区東端で検出した南北に延びる溝 ($N-2^{\circ}-E$) である。幅は60cm前後で深さ約26cmである。南でいったん西方向に曲がり、湾曲して東方向に進路を変え ($N-5^{\circ}-W$)、調査区外に続く。遺構埋土は、褐色粘質土のみの単純1層である。

出土遺物は、弥生土器358点、土師器7点、須恵器47点、備前及び近世陶磁器片34点が含まれている。

出土遺物 (第27図)

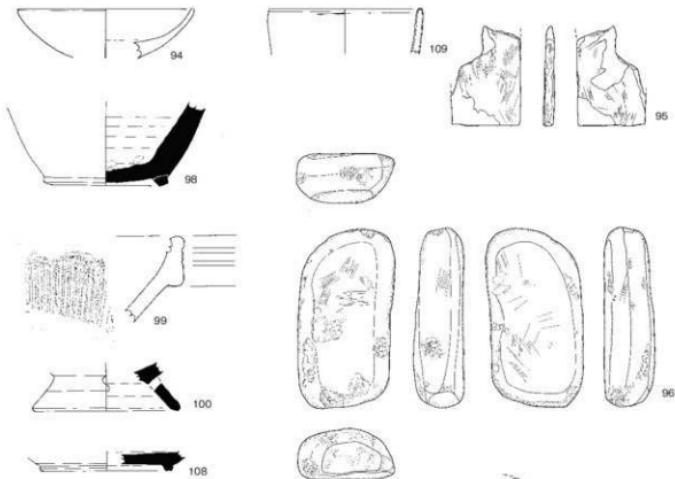
須恵器

89は蓋である。内外面にナデ調整を施す。焼け歪みがあり、外面中央には摘みが付いていた痕らしき盛り上がりが見られる。

もう一つの蓋 (90) は扁平摘みを有する。近世陶磁器

91は擂鉢である。SK6(ST1南の上面にあつ

第27図 SD1 セクション図・出土遺物



たハンダ土坑)出土の陶片との接合資料である。6条単位の条線を施す。胎土の粒が揃っており、口縁部内面付近は条線をナデ消して揃えている。底部外面にはケズリが施される。

92は備前鉢で、口縁の形状からV期に属すると考えられる。8条単位の条線が残る。

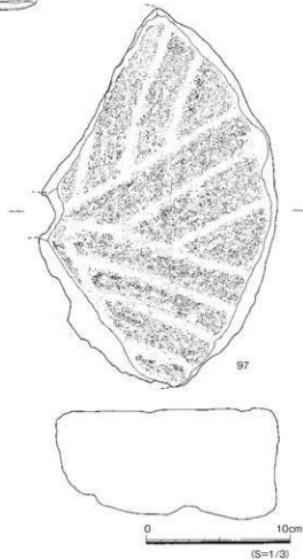
93の備前鉢はIV期前半から後半のものと考えられる。底部内面に条線が見られる。

SD2

SK3とSK6(どちらもハンダ土坑)を繋ぐ南北に延びる短い溝(N-5°-E)である。幅は50cm前後で、深さ10cmである。遺構埋土は褐色粘質土のみの単純1層で、弥生土器7点と焼成不良の須恵器1点を含む。図示できるものはなかった。

SD4

ST2からSD6に向かって東西に延びる溝(N-68°-E)である。ST2に切られている。弥生土器片を遺構埋土に含む。幅は40cm前後で深さ約10cmである。弥生土器35点が出土しているが、



第28図 SD6・8・9・15・16出土遺物

図示できるものはなかった。

SD5

SK60 から ST5 にかけて東西に伸びる溝 (N-80°-W) である。検出状況から、ST5 に切られたと考えられる。幅は 52cm 前後で、深さは約 8 cm である。

遺構埋土から出土した。遺物は弥生土器 51 点、須恵器 1 点だが図示できるものはなかった。

調査区北端から南に向かって延びる溝 (N-4°-E) である。幅は 1.4 m 前後で、深さは 50 ~ 70cm である。

遺構埋土に近現代の遺物を多く含むこと、他の溝と比べて深いことから現代の区画溝である可能性が高い。弥生土器 6 点、須恵器 8 点、近世陶磁器及び備前焼 16 点が出土している。

出土遺物（第 28 図）

近世陶磁器

94 は皿である。時期や产地は不明である。底部内面に砂目積の痕が残る。

石製品

95 は砥石である。表面・裏面・側面に使用痕があり、緑泥片岩の可能性がある。

96 は叩石である。砂岩製で、表面・裏面・側面に使用痕が見られ、端部には敲打痕も残る。97 は石臼である。表面に溝が残る。二次使用的痕跡は見られなかった。

SD7

調査区北西端から南に向かって延びる溝 (N-3°-W) である。途中で西に曲がって (N-70°-E) 調査区外に向かう。

幅は 60cm 前後で、深さは約 17cm である。弥生土器 67 点、須恵器 2 点が出土している。

SD8

調査区北西端から東に向かって延び (N-85°-W)、南に曲がってそのまま真っ直ぐ南下 (N - 4° - E) したのち、西方向に曲がる (N-85°-W) 溝である。SD10、SD24 と合流し、逆コの字を描く。幅 64cm 前後、深さは約 30 ~ 35cm である。出土遺物は弥生土器 36 点、土師器 10 点、須恵器 13 点が出土する。

出土遺物（第 28 図）

須恵器

98 は壺の底部である。輪高台を呈する。

備前

99 は口縁部にⅤ期の特徴を有する擂鉢である。図示し得なかったが、他にも、近世陶磁器などが出土している。

SD9

調査区中央付近、東から西向きに延びる溝 (N-90°-E) である。中央で南方向に曲がり真っ直ぐ南下する溝 (N-3°-E) である。

東は SD1 に切られている。幅 40 ~ 60cm、深さは約 14 ~ 18cm である。遺構埋土からは弥生土器 15 点、土師器 1 点、須恵器 33 点、近世陶磁器 2 点が出土している。

出土遺物（第 28 図）

須恵器

高坏 (100) は脚部に穿孔を施す。脚部のみ出土した。

SD10（第29図）

調査区中央付近、西端にあり、北から南に向かって延びる溝（N-2°-E）である。途中、SD8、SD24と合流する。幅40cm前後、深さ約10～14cmである。遺構埋土は暗褐色粘質土層で、単純1層である。埋土中からは弥生土器29点、須恵器11点、土師質土器51点などが出土している。

出土遺物（第29図）

黒色土器

椀（101）の口縁部が出土している。内墨で内面にヘラミガキ、外面にナデ調整を施す。

SD11（第30図）

ST7南に端を発し（N-10°-W）西方向に二度向きを変えてから南下する溝（N-0°-W）である。幅1m前後、深さ約14cmである。遺構埋土はⅠ層が黒褐色粘質土層で遺物包含層である。Ⅱ層はやや明るい黒褐色粘質土層で礫が混じる。弥生土器38点、土師器2点、須恵器17点、陶磁器2点が出土しているが、図示できるものはなかった。南下する途中でST11に切られる。

SD12（第30図）

調査区中央の東端から南西に向かって延びる溝（N-19°-E）である。

幅40cm前後、深さ約5～7cmと浅い。遺構埋土は黒褐色粘質土層の単純1層で、黄褐色土が混じる。弥生土器20点、須恵器2点を含む。

SD13（第30図）

SD11の途中から分かれ、南方向に延びる溝（N-3°-E）である。調査区南端で東向きに進路を変える（N-82°-E）。幅80cm前後、深さ約15～25cmである。

遺構埋土はⅠ層が黒褐色粘質土層で、Ⅱ層は黒褐色粘質土層でこぶし大の礫を含む。Ⅲ層も黒褐色粘質土層、Ⅳ層は褐色粘質土層である。弥生土器18点、土師器2点、須恵器15点のうち2点（102、103）を図示した。

出土遺物（第30図）

須恵器

102は壺の底部である。外面と輪高台の一部に自然釉が残る。103も器形は壺と考えられる。外面に刺突文を施す。

石製品

砂岩の叩石（104）が出土している。磨耗が激しい。

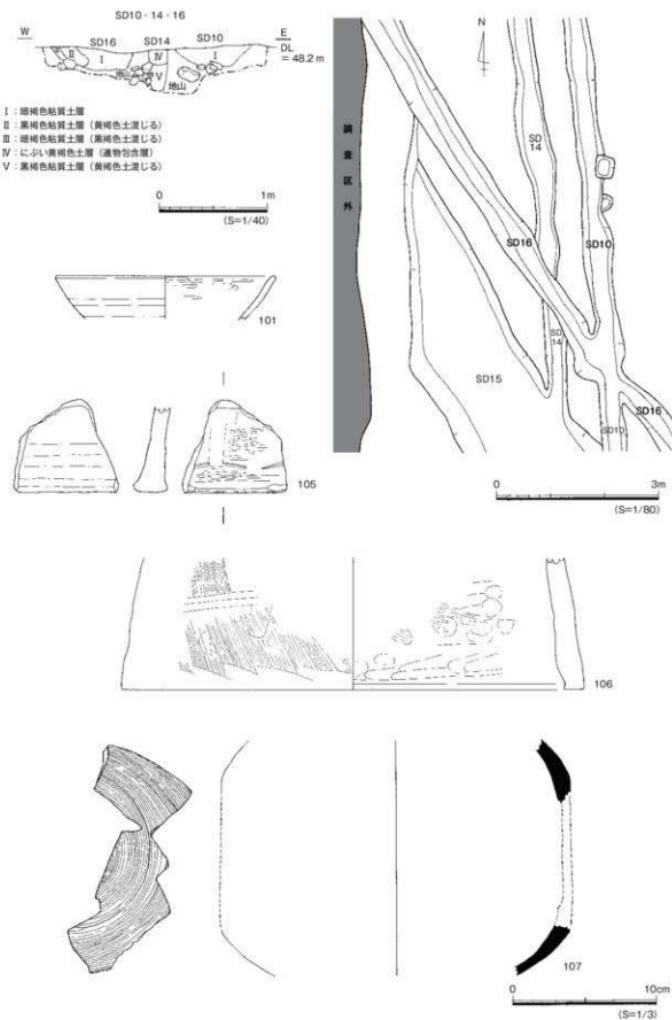
SD14（第29図）

調査区西端にあり、南北方向に延びる溝（N-00°-W）である。幅44cm前後、深さ約4～5cmで、北方向に同じく南北に延びるSD24が同一の溝ではないかと推定ラインを精査したが、遺構のプランは見つからなかった。遺構埋土は2層に分かれており、Ⅳ層がにぶい黄褐色粘質土層V層が黒褐色粘質土層である。出土遺物は弥生土器31点、土師器11点、須恵器27点、陶磁器7点、製塙土器1点である。

出土遺物（第29図）

土師器

105は移動式竈の底部分と考えられ、口唇部と内面に煤が付着する。外面に綴、横方向にナデ調整を施す。ヘラで三ヵ所、横方向に切込みを入れてある。106は移動式竈下部で煤の付着はなく、外面斜め方向にハケナデ、内面指頭圧痕による調整を行った後、横方向にナデ調整を施す。



第29図 SD10・14・16平面・セクション図・出土遺物

須恵器

107は横瓶と考えられる。外面に同心円のカキ目文を巡らす。

SD15（第29図）

調査区西から南東方向に延びる溝（N-27°-W）である。幅は他の溝と比べて広く、1.8～2m前後、深さ約13cmで、SD10とSD13に切られる。

遺構埋土はI層が黒色粘質土層、II層が黒褐色粘質土層で小砾を含む。出土遺物は弥生土器61点、土師器6点、須恵器14点、砥石1点、製塙土器1点がある。

出土遺物

108は須恵器杯である。底部は輪高台を呈する。内面は滑らかである。

SD16（第29図）

調査区西からSD15と並行して南東方向に伸びる溝（N-27°-W）である。幅52cm前後、深さ約20cmで、SD10とSD14を切る。

南下したところで東に向きを変える。（N-90°-E）遺構埋土からは弥生土器105点、土師器13点、須恵器33点、製塙土器1点が出土している。

出土遺物（第28図）

109は青磁である。口縁部のみで胎土は白く、内外面施釉する。

SD19

SD6からST2に接し、東西方向に伸びる溝（N-90°-E）である。幅35cm前後、深さ約5～10cmと小さい溝で、土師器7点、須恵器1点が出土しているが、図示できるものはなかった。埋土は黄褐色粘質土層のみの単純1層である。

SD20

調査区北寄り、幅50cm前後、深さ約10cmの溝（N-32°-E）である。東西に伸びるSD5の途中から南に分かれ、ST7に向かって伸びる。ST7に切られる。弥生土器38点が出土しているが図示できるものはなかった。

SD22

調査区南端にある、東西に伸びる溝（N-86°-E）である。幅70cm前後、深さ約20cmで、遺構埋土からは弥生土器19点、土師器1点が出土しているが、図示できるものはなかった。

SD23

調査区中央付近、東寄りに東西に伸びる溝（N-90°-E）である。長くは伸びていない。遺物埋土には弥生土器15点、須恵器1点を含むが、図示できるものはなかった。

SD24

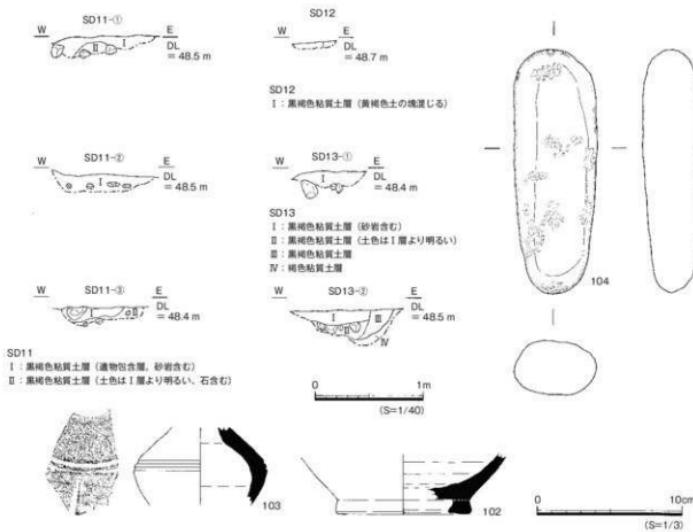
調査区西端、SD10と並行して南北に伸びる溝である。南端でSD8、SD10と合流する。

幅40cm前後、深さ約22cmである。遺構埋土からの出土遺物はなかった。

（4）土坑

SK4（第31図）

調査区北東、ST1西に位置するハンダ土坑である。廃絶する時に周間に組んでいた石組を解体し、遺構内へと放り込んだものと考えられる。赤色土が混じる褐色粘質土によって床面及び壁面が固められて



第30図 SD11・12・13セクション図・SD13出土遺物

いるのが検出された。弥生土器20点、近世陶磁器片1点が出土しているが、図示できるものはなかった。P25に切られる。

SK6（第32図）

ST1の南端に位置するハンダ土坑である。弥生土器50点が出土している。

出土遺物（第32図）

弥生土器

壺（110）を図示した。外面は頸部から胴部にかけて縦方向のハケ調整を施す。口縁部内面は横方向のハケ調整がみられる。

SK7（第32図）

調査区北端に位置する長方形の土坑である。北半分は調査区外となる。

弥生土器122点、細片175点、須恵器1点が出土する。弥生土器の広口壺（111）は、口唇部に斜め方向の刻み目が見られる。内面はヘラミガキ、外面はわずかに横方向のハケ調整が残る。

土錐（112）も出土している。細身で、片方欠損する。

SK12

調査区北、SD6の東に位置するハンダ土坑である。弥生土器7点、土師器2点、須恵器9点、陶磁器片1点が出土している。遺構の周囲を囲む石組がよく残り、赤色土と黄色土を内部の壁面と床面につき固めている。SK13も同じ工法で成形されており、2つのハンダ遺構は同時期のものと考えられる。

SK13

ハンダ土坑である。北に隣接するSK12と同時に機能したものと考えられる。弥生土器3点、土師器2点、須恵器4点、陶磁器片2点が出土しているが図示できるものはなかった。

SK16(第32図)

調査区東端にあり、SD1を切っている。埋土中に砂岩が多く混じる。弥生土器6点、細片14点、須恵器1点、製塙土器2点、瓦4点が出土している。石臼(113)は砂岩製である。

SK23

調査区中央近く、東端で検出したハンダ土坑である。直径約1.8mの土坑が廃棄された後、直径約1mのハンダ土坑が円周内のやや西寄りに掘られている。また、土坑の周間に直径がほぼ同じ柱穴が巡る。弥生土器9点、須恵器8点が出土しているが、図示できるものはなかった。

SK31(第33図)

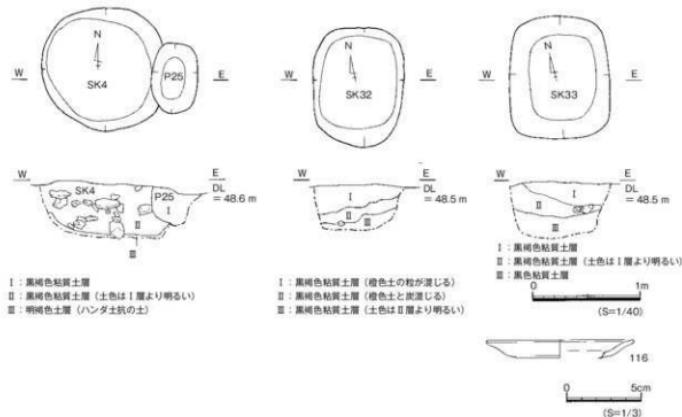
調査区中央南寄り、SD9の西に隣接する長方形の土坑である。弥生土器2点、細片4点、須恵器2点と土師質土器杯2点(114・115)が出土している。いずれもロクロ成形で底部に回転糸切り痕を有する。

SK32(第31図)

調査区南寄り、SD11東に位置する土坑である。隅丸方形を呈し、遺構埋土は3層に分かれる。弥生土器23点、土師器10点、須恵器15点が出土している。

SK33(第31図)

SK32のすぐ南に位置する。隅丸方形を呈し、遺構埋土は3層に分かれる。弥生土器15点、土師器6点、須恵器4点が出土している。



第31図 SK4・P25・SK32・SK33平面・セクション図・出土遺物

出土遺物（第31図）

土師器

116は小皿である。口縁端部を少し外に摘み出している。ロクロ成形である。

SK35

調査区南東端に位置する。長方形の土坑で弥生土器細片4点、土師器細片4点が出土している。

出土遺物（第33図）

土師質土器

117・118は小皿である。いずれも底部回転糸切り痕が見られる。

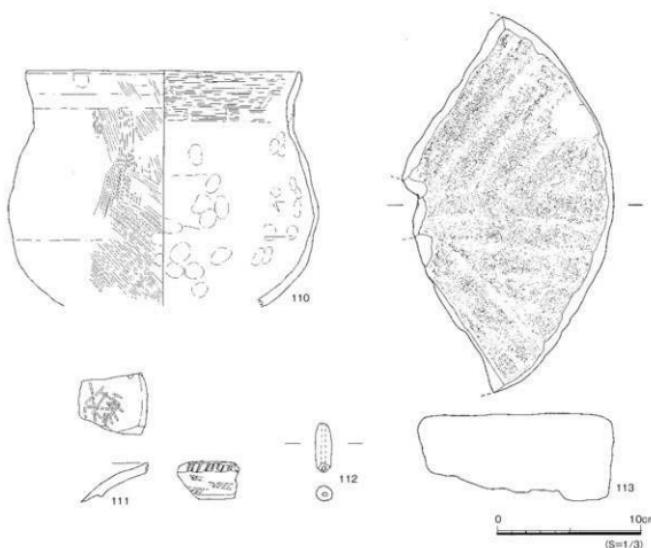
SK38

調査区南東端、SD22の北に位置する。弥生土器5点、細片20点が出土する。

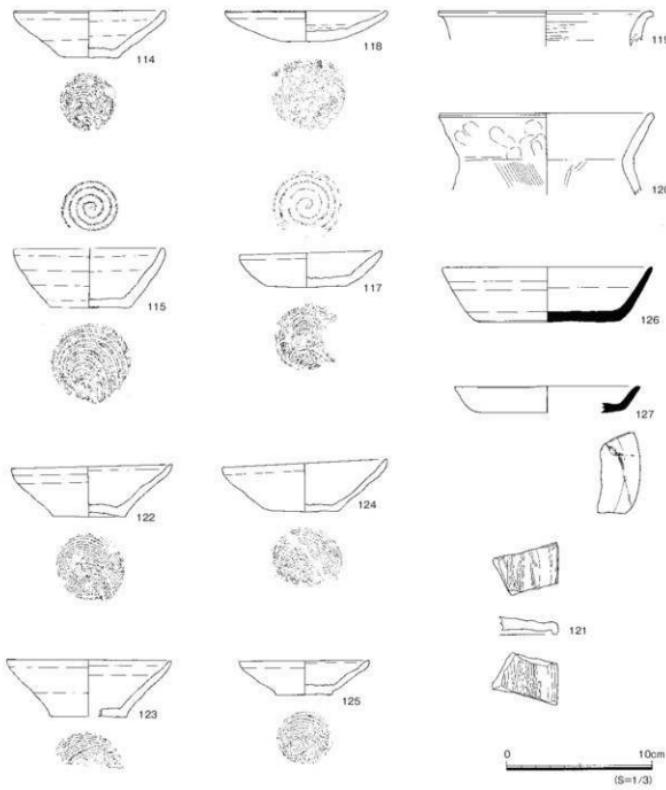
出土遺物（第33図）

弥生土器

119は甕である。口唇部を摘み出しており、口縁部の内外面に横ナデ調整を施す。同じく120は、外面が口縁部から胴部にかけて被熱し黒い。口縁部の内外面に横ナデ調整を施す。外面は胴部に斜め方向のハケナデ調整がみられる。内面は頸部から胴部にかけて縦方向のヘラナデ調整を施す。



第32図 SK6・7・16 出土遺物



第33図 SK31・35・38・49・51出土遺物

SK49

調査区南東端に位置する円形の土坑である。長径88cm、短径84cmを測る。

出土遺物（第33図）

土師質土器

122・123・124・125は遺構上面から出土しており、いずれも底部回転糸切り痕を有するロクロ成形が見られる。

SK51

SB3西に隣接する方形に近い土坑である。弥生土器57点、細片96点、須恵器4点が出土している。

出土遺物（第33図）

須恵器

126・127は杯である。いずれもナデ調整を施す。

SK52

調査区北西端に位置する焼成土坑である。被熱したと考えられる赤色粘質土が遺構埋土の層序の一つを成しており、多量の土師質土器が出土している。器壁は薄く、底部回転ヘラ切り痕と静止ヘラ切り痕が見られるものが多数を占める。弥生土器50点、土師器848点、須恵器2点が出土している。土師器の中には移動式竈の底部分を含む。出土量に対して接合により復元できた遺物が少ないため、出土した土師質土器の多数は焼成段階で製品とならなかった土器が廃棄されたものと考えられる。

出土遺物（第34図）

土師器

128～144はいずれもロクロ成形の杯である。底部に回転ヘラ切り痕がみられる個体と、静止ヘラ切り痕が見られる個体とが混在する。黒斑が付着する個体もある。145は皿である。146は移動式竈の底部分である。外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整を施す。147は古代の壺と考えられる。口縁部と胴部の境に横方向の凹線が見られ、外面頸部には縦方向ハケ調整を施す。9世紀後半から10世紀前半の製品である可能性が高い。148は土鉢である。両端に面取を施す。

（5）ピット（第35～37図）

P5

調査区北端に位置する。出土した149は寛永通宝である。劣化が激しい。

P427

SD11東に位置するピットで、166は弥生土器の壺である。口縁部外面には横方向のナデを施し、口唇部は面取して内側にわずかに折る。土師器の高坏脚部（167）は心棒成形で外面は十一角形を呈し、ヘラミガキを施す。

（6）包含層出土遺物

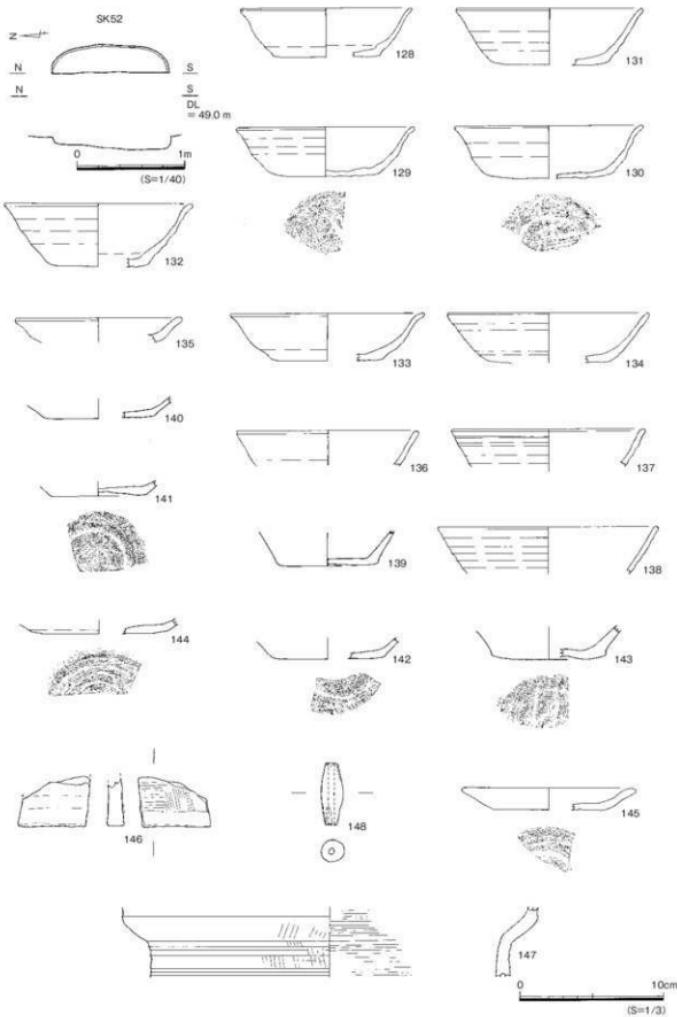
弥生土器（第38～41図）

185-①は弥生時代の壺である。底部近くの胴部外面に一ヵ所黒く焦げた部分がある。外面は横方向のタタキ成形を施した後、縦方向にハケ調整を入れる。底部は平底を呈する。内面は頸部から胴部にかけて指頭圧痕が顕著に見られる。185-②の胴部出土地点と同じ位置から口縁部が出土しており、同一個体と考えられる。口唇部外面下に指頭圧痕を施した後、横ナデしている。粘土帶を貼付し、突帶を作り二重口縁としている。195はミニチュア土器である。196～207・209は壺である。外面タタキ成形を施すものが多い。

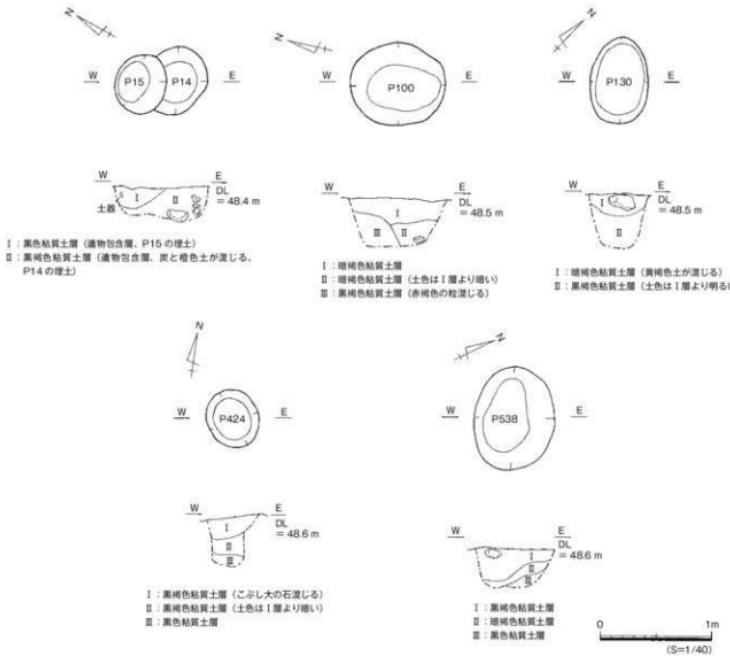
208～223は鉢である（209を除く）。外面は横方向にタタキ成形を施す個体が多い。214は内面口縁部にハケ調整があり、底部外面に葉脈痕が明確に残る。224～228は高坏である（脚部のみ含む）。このうち、224は口縁部内面には横方向に、外面には放射状にハケ調整を施している。

土師器（第41～43図）

土師器は、底部にヘラ切り痕を有する個体が圧倒的に多い。特に焼成土坑SK52付近での出土数はか



第34図 SK52平面・エレベーション図・出土遺物



第35図 P14・15・100・130・424・538平面・セクション図

なり多い。229は製塙器である。内面に布目痕が残る。230～235は内外面に回転ロクロ成形を施す土師器杯である。底部は回転ヘラ切り痕が見られる。

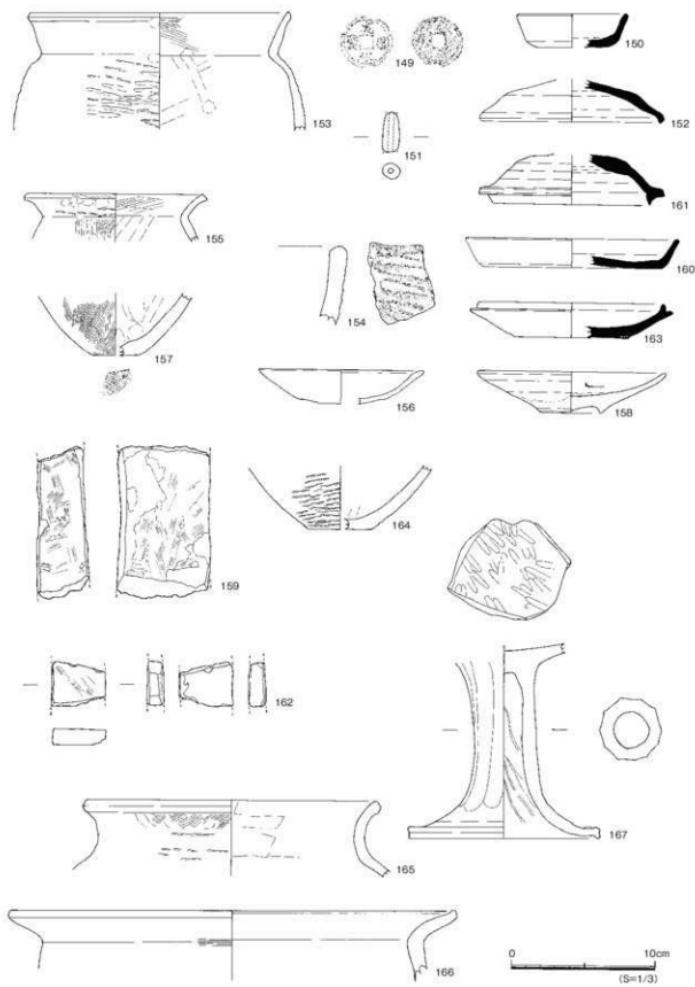
238は黒色土器である。240～243は、回転ロクロ成形で仕上げた土師器皿で、底部外面に回転ヘラ切痕が見られる。244・245は杯で、内外面ヘラミガキが見られる。250～252は土師器杯蓋である。250・251は扁平摘みが付く。253・254は移動式竈である。底の部分と考えられ内面には煤が付着する。258～262は土鍾である。

縁釉陶器（第43図）

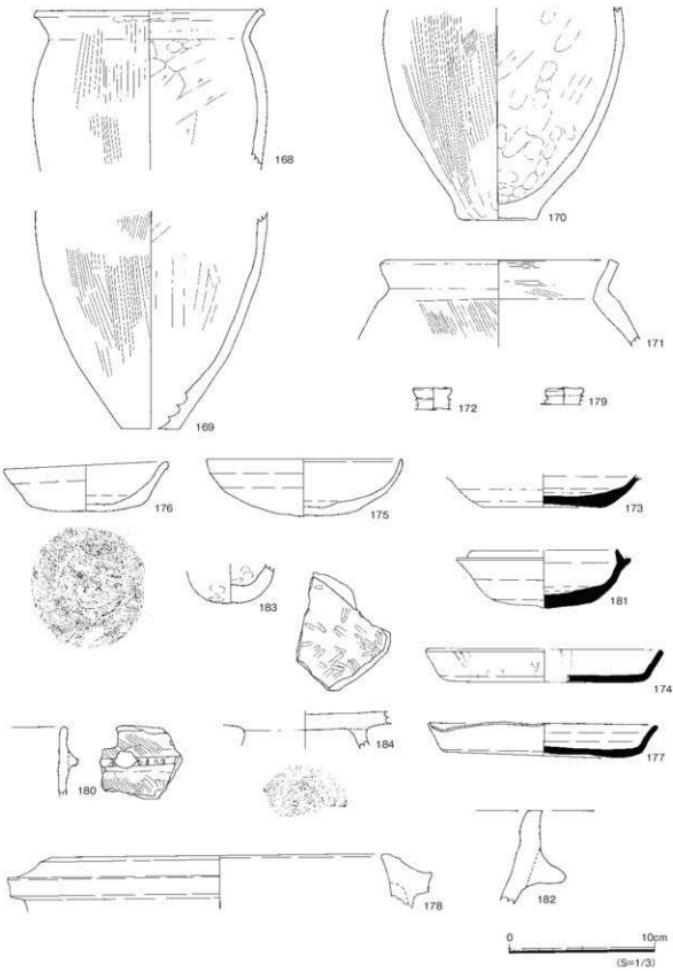
一点出土している263は、器形は皿である。内外面に軸がかかる。輪高台を呈する。

須恵器（墨書き土器）（第43図）

器種はバラエティに富む。墨書き土器は265～268で、器形は杯、皿である。265は杯で、外面に一字文字の墨書きが見られる。文字として判読はできるが、読みや意味などの特定はできない。266は底部のみ残存する。底部外面に墨書きが見られ、赤外線での撮影により僅かに読み取れるが、265と同様に読みや



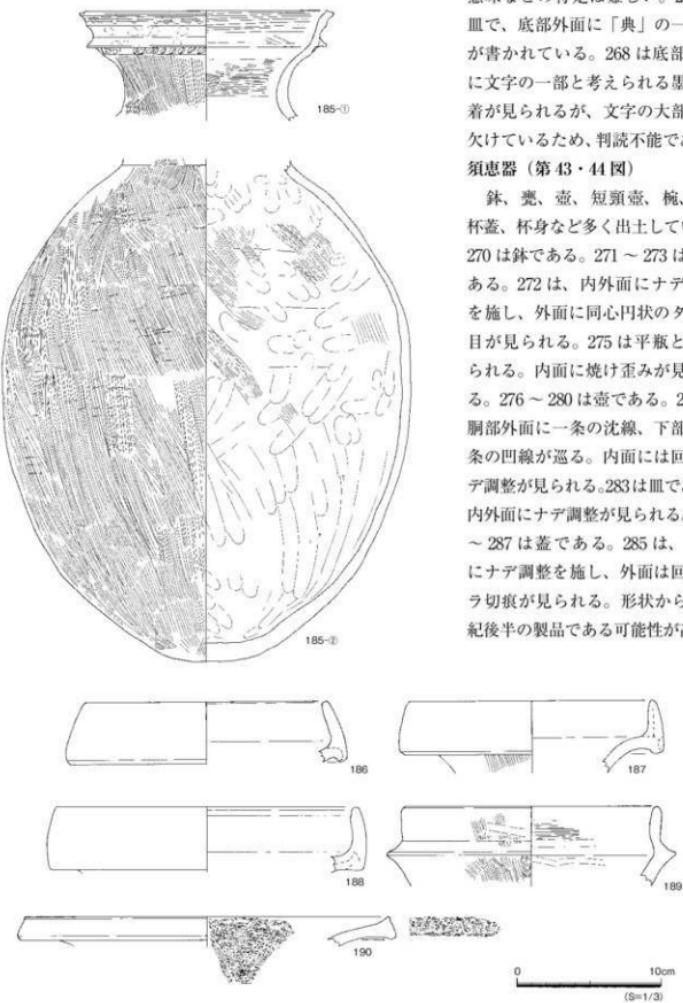
第36図 ピット出土遺物 1



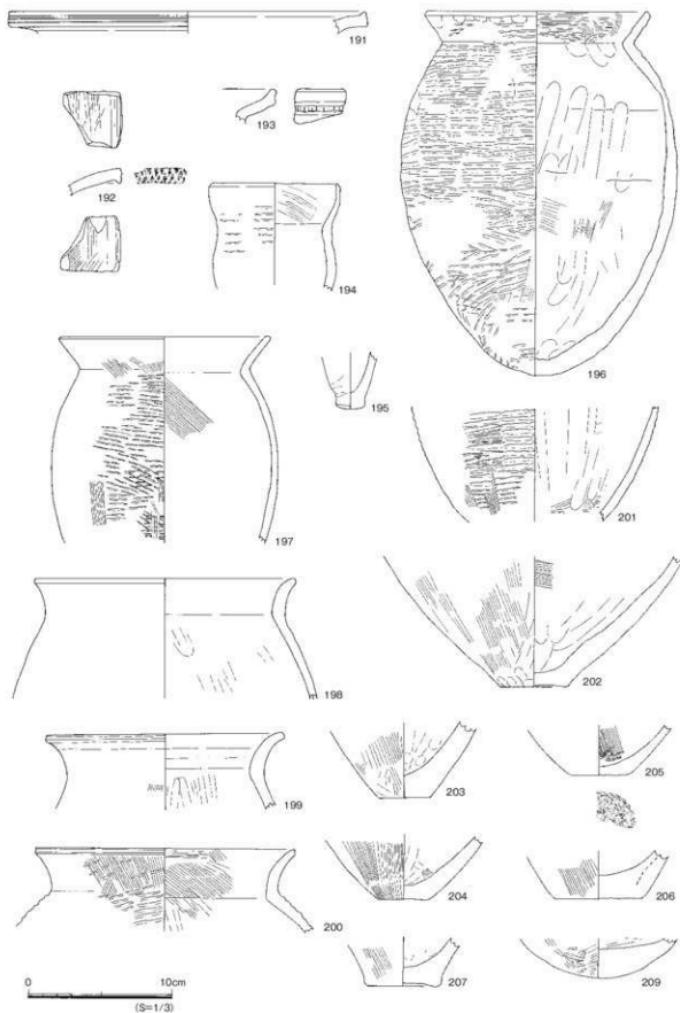
第37図 ピット出土遺物2

意味などの特定は難しい。267は皿で、底部外面に「典」の一文字が書かれている。268は底部外面に文字の一部と考えられる墨の付着が見られるが、文字の大部分は欠けているため、判読不能である。須恵器（第43・44図）

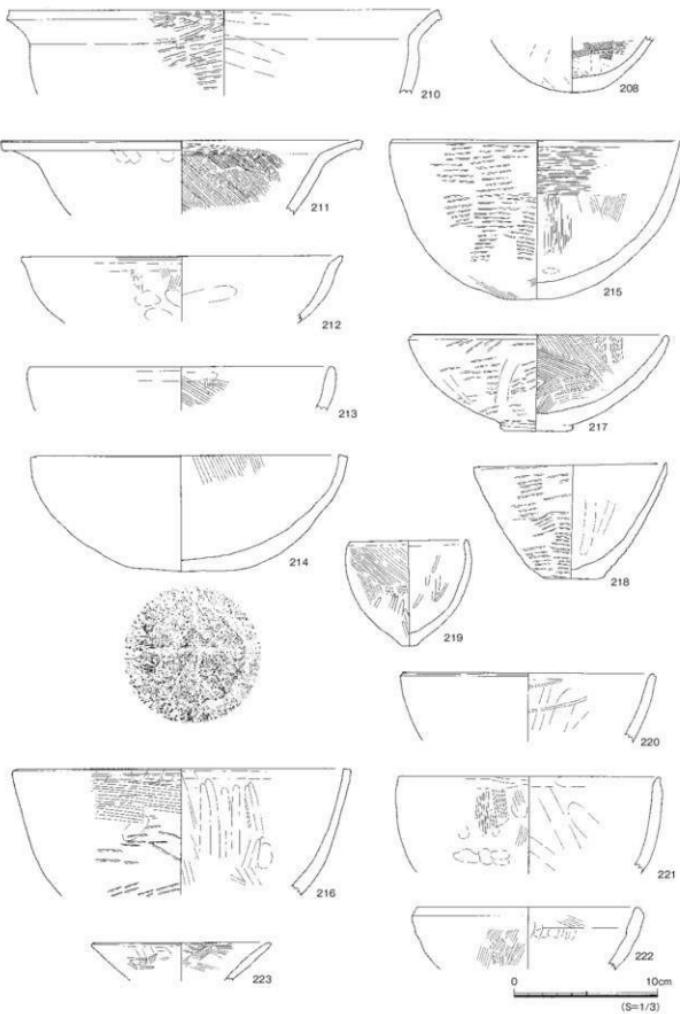
鉢、壺、壺、短頸壺、椀、皿、杯蓋、杯身など多く出土している。270は鉢である。271～273は壺である。272は、内外面にナデ調整を施し、外面に同心円状のタタキ目が見られる。275は平瓶と考えられる。内面に焼け重みが見られる。276～280は壺である。278は胴部外面に一条の沈線、下部に二条の凹線が巡る。内面には回転ナデ調整が見られる。283は皿である。内外面にナデ調整が見られる。284～287は蓋である。285は、内面にナデ調整を施し、外面は回転ヘラ切痕が見られる。形状から8世紀後半の製品である可能性が高い。



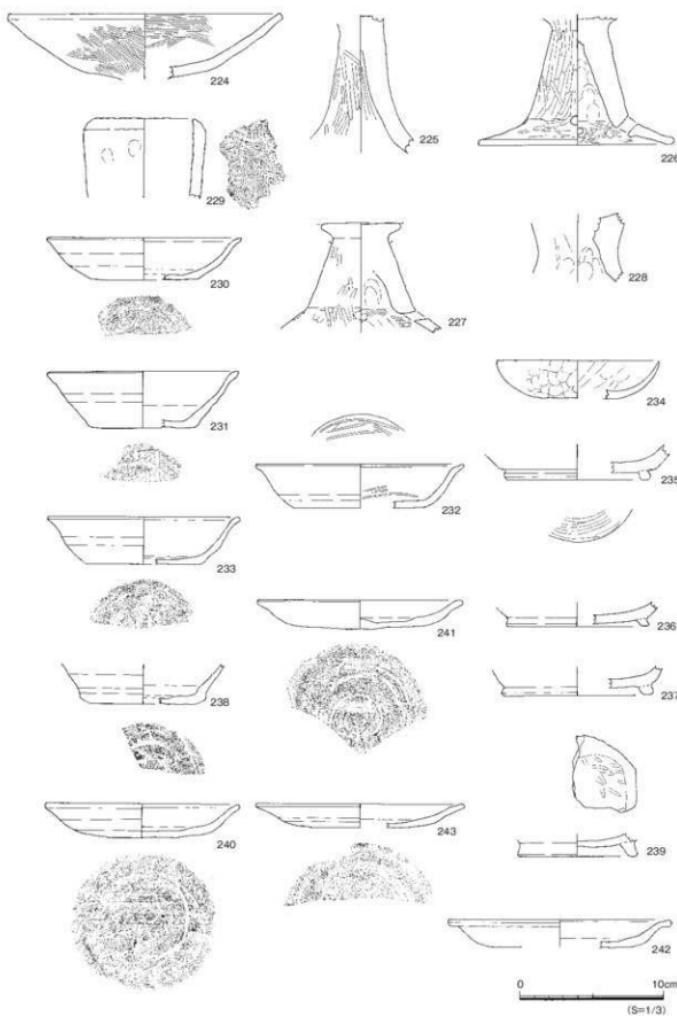
第38図 I区包含層出土遺物1



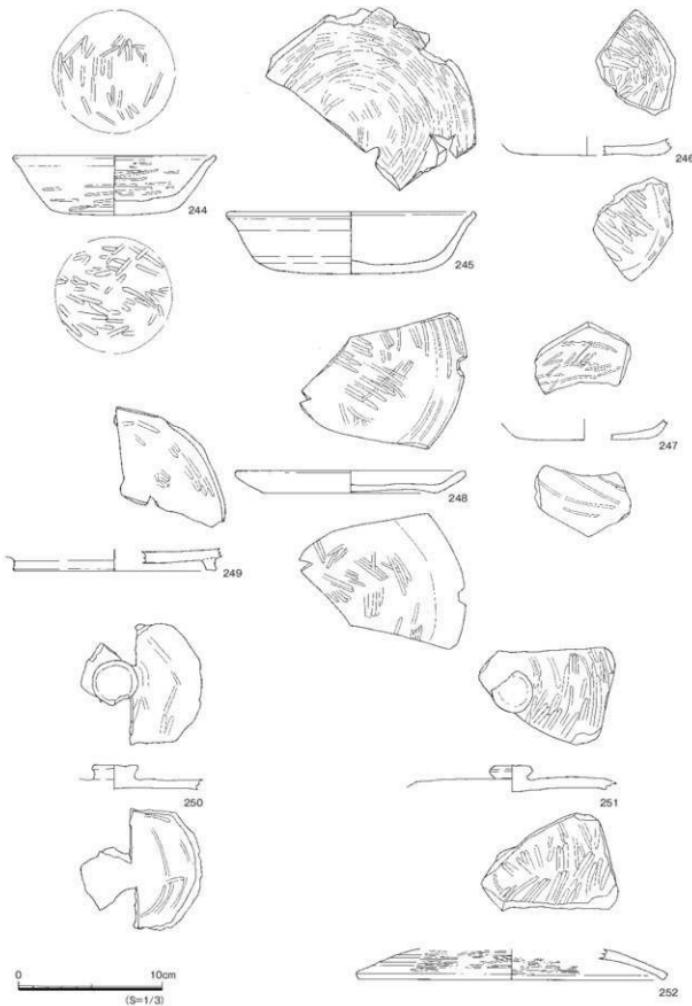
第39図 I区包含層出土遺物 2



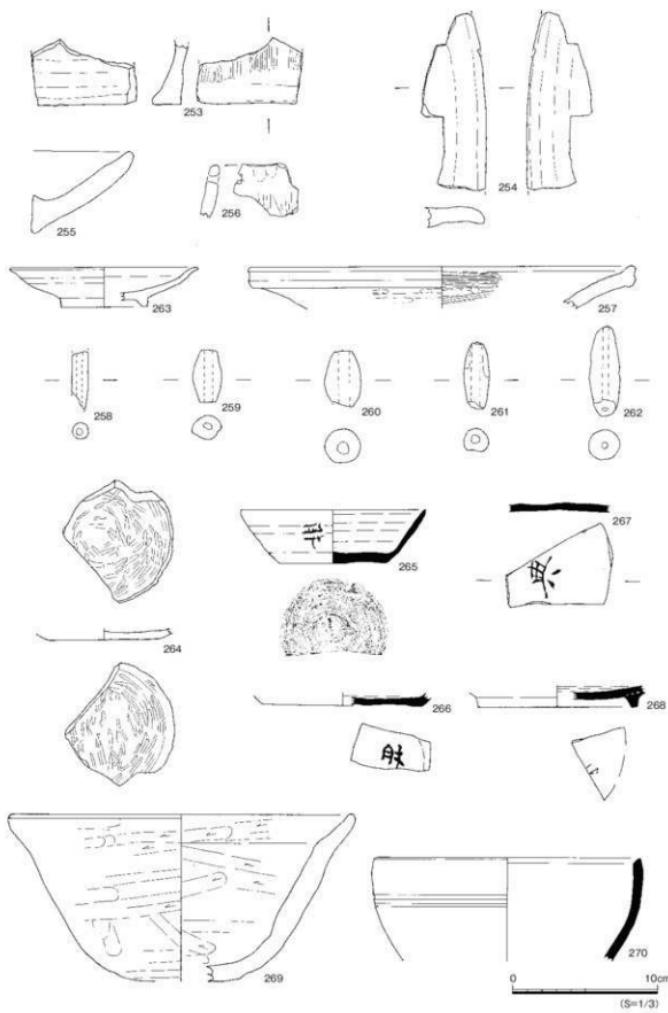
第40図 I区包含層出土遺物 3



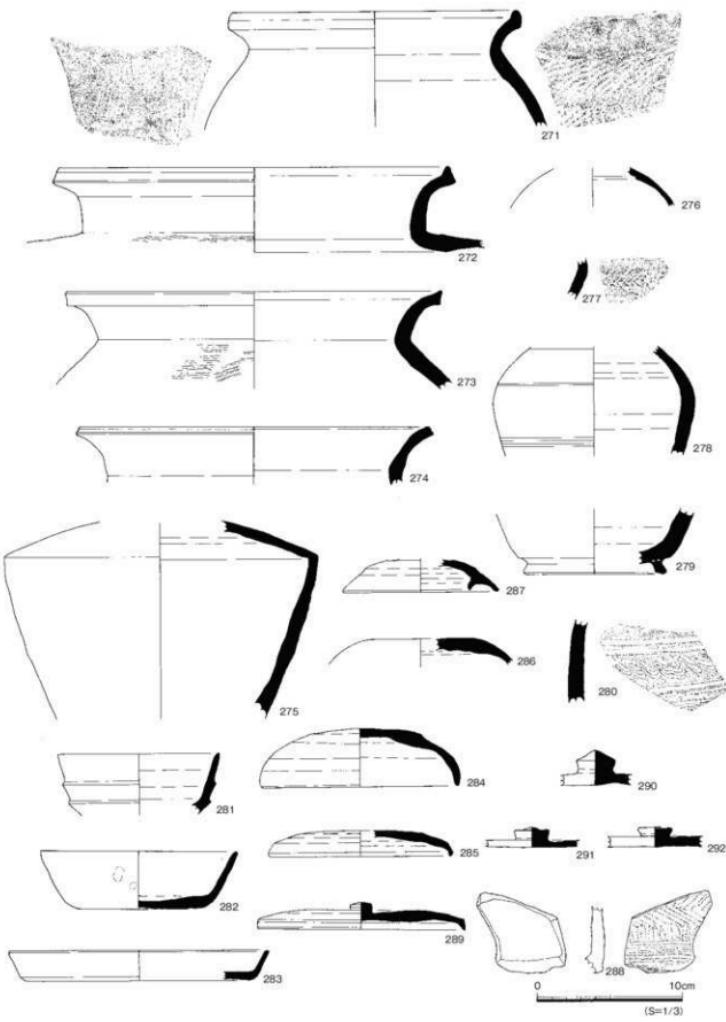
第41図 I区包含層出土遺物4



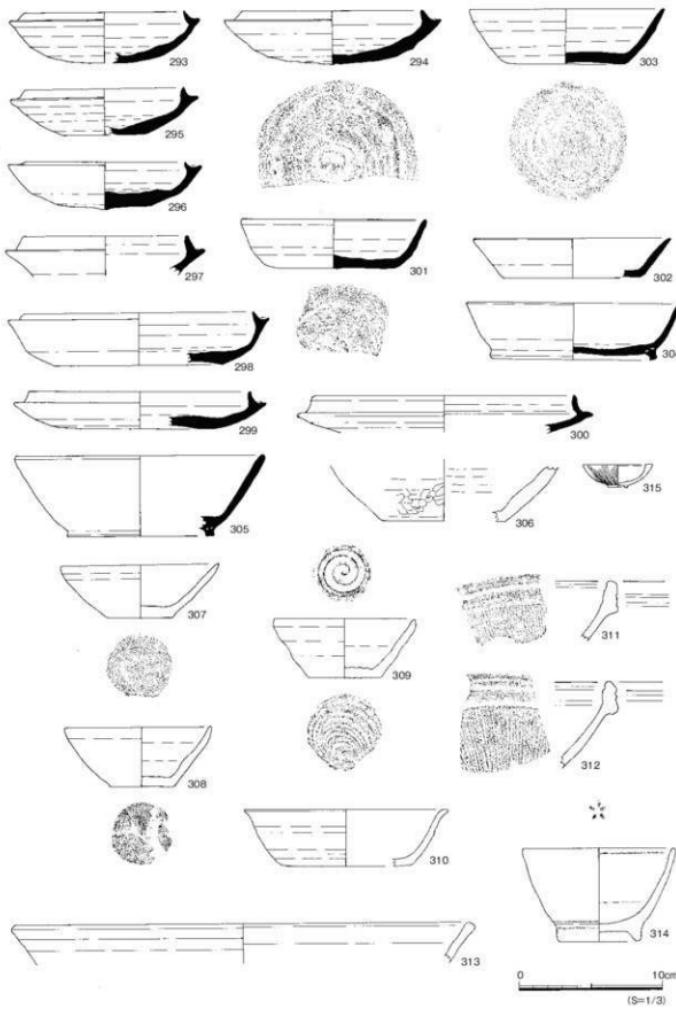
第42図 I区包含層出土遺物5



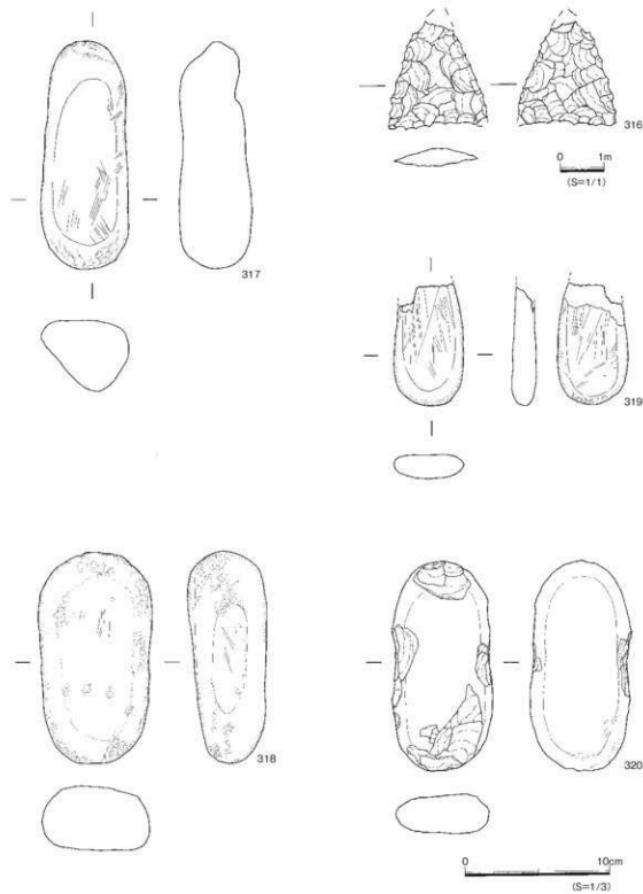
第43図 I区包含層出土遺物 6



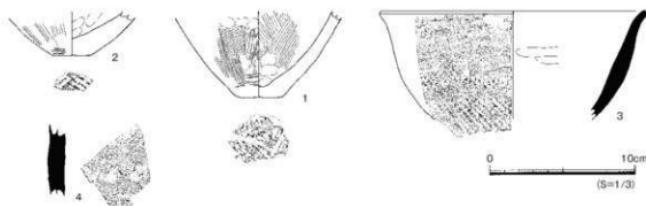
第44図 I区包含層出土遺物7



第45図 I区包含層出土遺物 8



第46図 I区包含層出土遺物9(石製品)



第47図 II区包含層出土遺物

土師質土器（第45図）

307～309は杯である。いずれも調整は回転ナデで底部の切り離しは回転糸切りである。土師質土器が集中出土したSK49南の包含層からいずれも出土している。

備前焼・近世陶磁器（第45図）

311・312は備前焼の擂鉢である、311は内面に櫛描文が残るが、単位は不明である。312は内面に8条単位の櫛目が現存する。どちらもV期の形状と酷似する。近世陶磁器は、広東碗（314）と紅猪口（315）が出土している。314は見込に梅花文が見られる。

石製品（第46図）

316はサスカイト製の石鎌である。先端部分が欠損している。317は叩石である。砂岩で、上部と下部に敲打痕が認められる。318は叩石である。両端に敲打痕が認められる。

319は表面採取の磨製石斧である。両面に擦痕が認められる。320も表面採取で、石錐である。中央部左右に抉りがある。

II区包含層出土遺物（第47図）

1と2は弥生土器の鉢である。どちらも、外面縦方向にハケ調整が施される。底部付近にはタタキ目が残り、内面は指頭圧痕が認められる。

3は須恵器で、無蓋の台付鉢と考えられる。口縁部は外反しており、胴部に文様が認められる。

4も須恵器で、胴部に波状文が認められる。

第V章 総括

今回の調査区は、近代以降の区画溝と考えられる南北方向の溝が確認できたが、堆積状況を見ると後世の攪乱の影響はほとんど受けていないと考えられる。

『伏原遺跡II』において居住域と想定される範囲に調査区全域が取まつており、墓域は認められない。

I区では竪穴建物跡11棟、掘立柱建物跡7棟、溝20条、土坑57基、ピット多数を検出した。以下、時期ごとにまとめる。

弥生時代終末期～古墳時代初頭

ST3が該当する可能性がある。このST3周辺には異なる時代の竪穴建物跡が数棟、掘立柱建物跡二棟が検出されていることから、調査区北端に当たる丘陵裾部に近い当該地が居住に適した地点と考えられる。

古墳時代

ST1、ST7、ST10が該当すると考えられる。カマド状造構があるものとないものとがある。北に位置する鏡野学園古墳や南の伏原大塚古墳など、周辺に点在する古墳と集落の位置や時期差を考えるうえで、今後検討が必要である。

古代

ST11が該当すると考えられる。他の竪穴建物跡と比べ急な角度で深めに掘り込まれている。

遺構内の東壁に張り付く形で半月状の石が出土したが、カマドを構成する石の可能性がある。SK52は焼成土坑で、底部に静止ヘラ切り痕のある杯や皿が多く出土する。前述のとおり、出土数に対して完形が少ないと判っており、居住区に焼成された日常で使用する製品を焼いた土坑ではないかと考えられる。

また、調査区の北と南に掘立柱建物跡が展開する。調査区南の包含層から縁釉陶器、墨書き土器が出土していることから、近接するひびのきサウジ遺跡との関連を考える必要がある。

中世

SK49は中世の土坑と考えられる。土師質土器等の遺物は何点か確認されている。調査区東、約800mの地点に楠目城跡（山田城跡）が存在することから、城跡の南に展開する中世集落との関連が考えられる。

近世

溝ではSD1が該当する。ハンダ土坑としてはSK6、12、13、18、23、24が該当する。

いずれも壁及び底はハンダで塗り固められている。検出面のプランに沿って砂岩が並ぶ場合が多く、SK12とSK13は一組である。

参考文献

『ひびのきサウジ遺跡』 土佐山田町教育委員会 1990

『伏原遺跡II』 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010

I 区 遺物観察表

因版 番号	遺構 部位	器種	器形	法量 (cm)			表面色調	特徵
				口径	器高	底径		
1	ST1	弥生土器	甕	(3.3)	5.0	に赤い縫	底部近くの外表面ハケ調整。内面ヘラケズリ。	
2	ST1	土加器	支脚の角部	(5.7)		縫	角部か、指頭圧痕が覗る。	
3	ST1	須恵器	杯身	11.5	3.8	7.0	灰	底部外表面ハケ切り痕。外面ナデ調整。
4	ST1	須恵器	鉢	(6.6)	10.6	灰白	外表面横方向タキ成形。内面ナデ調整。	
5	ST2	弥生土器	甕	10.9	4.1	2.4	に赤い縫	内外面の指頭圧痕が覗着。
6	ST2	弥生土器	鉢	22.8	(6.0)		縫	外表面口唇部ナデ、胴部にかけ縫方向ハケ。内面指頭圧痕。
7	ST2	土加器	底部	(1.4)	10.4		縫	内面全体にヘラミガキ。縫高台。
8	ST3	弥生土器	甕	15.0	(5.4)		縫	内外面口唇部指頭圧痕。外表面横方向タキ。内面ナケ調整。
9	ST3	弥生土器	鉢	13.8	(6.8)		縫	口縁部内外面横方向ナデ調整。胴部内面縫方向ハケ調整。
10	ST3	弥生土器	甕	13.8	7.7	1.4	陶灰	外表面横方向タキ成形。内面右上がりナデ調整。底端に穿孔。
11	ST3	弥生土器	鉢	12.9	5.0	3.8	縫	外表面右上がりタキ成形。内面指頭圧痕。底部附合高台。
12	ST3	弥生土器	不明	8.9	(2.0)		縫	口縁部ナデ調整。
13	ST3	弥生土器	高杯	9.5	(3.8)		に赤い縫	杯部のみ残存。外面上唇部に粘土を貼り重ねた痕有。
14	ST3	弥生土器	支脚	6.5	10.1	8.4	に赤い縫	外表面指頭圧痕あり。
15	ST6	弥生土器	甕か	(3.4)	3.2		に赤い縫	底端のみ残存する。外面部も摩耗が激しい。
16	ST7	弥生土器	甕	16.0	(6.9)		に赤い黄褐色	口唇部面取り。外表面横方向タキ成形。内面縫方向ナデ調整。
17	ST7	弥生土器	瓶	(7.6)	4.0		に赤い黄褐色	外表面横方向タキ成形。内面縫方向ナデ。
18	ST7	土師器	ミニチュア器	2.5	4.5	2.6	に赤い縫	内外面とも指頭圧痕が覗着。
19	ST7	須恵器	蓋	17.4	(2.0)		に赤い黄褐色	焼け歪み、ツマミ欠損。ナデ調整。
20	ST9	弥生土器	甕	17.2	(16.8)		縫	口縁部内外面横方向ナデ調整。胴部内面縫方向マギキ有。
21	ST9	弥生土器	甕	17.3	(14.5)		明褐	口縁部外側ナデ調整。胴部内面縫方向ヘラナデ。
22	ST9	弥生土器	甕	15.5	(5.3)		に赤い黄褐色	内面口唇部縫横ナデ調整。外面部保有。ハケナデ調整。
23	ST9	弥生土器	瓶	(3.3)	1.1		陶灰	外表面横方向タキ成形。ほぼ直進に穿孔する。
24	ST9	弥生土器	鉢か	(3.0)	3.8		黒褐色	外面上にハケ調整。
25	ST9	弥生土器	取っ手	(6.9)			に赤い縫	外面上に指頭圧痕。ひねり出し。内面は丸いケズリ調整。
26	ST10	弥生土器	甕	17.2	27.9	47	に赤い縫	外面上口縁部から底部にかけてヘラミガキ。内面強い縫方向ナデ調整。
27	ST10	弥生土器	甕	20.6	25.6	5.0	縫	外面上口縁部から底部にかけてヘラミガキ。内面縫方向ナデ調整。
28	ST10	弥生土器	甕	15.6	(10.7)		に赤い縫	外表面胴部縫方向ナデ調整。内面縫方向ナデ調整。
29	ST10	弥生土器	甕か	(3.5)	2.5		陶灰	底部のみ、外表面胴部から底部斜方方向タキ成形。
30	ST10	土師器	高杯	13.8	(7.0)		縫	摩耗激しい。脚部外側に指頭圧痕。脚部の長さ不明。
31	ST10	須恵器	杯か	(2.2)	8.7		灰白	底部のみ残存。縫高台を呈する。
32	ST10	須恵器	杯	12.8	3.2	7.2	灰黃	口クロ成形。口唇部がだらかに外反する。
33	ST11	弥生土器	甕	16.7	15.2	4.0	に赤い縫	外表面縫方向ハケ調整。底部は船方向ハケが密。
34	ST11	弥生土器	甕	20.0	(9.7)		に赤い縫	外表面ハケ調整。口縁部横方向ナデ。
35	ST11	弥生土器	甕	12.4	(3.8)		に赤い黄褐色	口縁部面取り。
36	ST11	古式土師器	甕	24.8	(2.3)		に赤い縫	内外面とも横方向に強いナデ調整。
37	ST11	土師器	杯	13.0	(2.8)		縫	回転ナデ調整。内面赤いヘラミガキ。
38	ST11	土師器	杯	13.6	3.2	8.6	縫	底部ヘラ切痕あり。内外面とも底部ヘラミガキ。
39	ST11	土師器	杯	13.8	3.7	7.2	に赤い縫	内外面横方向ヘラミガキ。一部剥離。
40	ST11	土師器	皿か鉢	(2.0)	10.8		黒褐色	内面ヘラミガキ。外面黒色。縫方向ヘラミガキ。
41	ST11	製塙土器	甕	7.0	(3.5)		浅黄縫	内面布目筋。外表面指頭圧痕。
42	ST11	須恵器	杯	12.8	3.8	8.4	灰	底部外表面斜面ハケ切り机。外外面ナデ調整。
43	ST11	須恵器	杯	12.4	3.7	7.6	に赤い縫	底部ヘラ切痕有。内外面強いナデ調整。
44	ST11	須恵器	杯	13.6	(3.3)		明褐灰	内面ナデ調整。
45	ST11	須恵器	甕	16.8	2.2	11.6	灰	内外面ナデ調整。
46	ST11	須恵器	甕	15.4	1.8	10.6	黄灰	内外面ナデ調整。
47	ST11	須恵器	蓋	13.2	(1.9)		暗灰黃	内外面ナデ調整。外面自然釉。
48	ST11	須恵器	蓋	17.8	1.7	7.0	灰白	焼成不良。
49	ST11	石製品	鉋跡の石	全長 30.6	全幅 17.0	全厚 8.8	—	重量 6.100g。砂岩。表面は扁平。裏面は黒く煤ける。
50	ST11	石製品	砥石	7.2	2.9	2.7	—	重量 97g。砂岩。研磨されやや凹む。
51	ST12	弥生土器	甕	13.0	(4.6)		縫	外表面横方向タキ成形。縫方向ハケ調整で消す。
52	ST12	弥生土器	甕	16.9	(3.8)		に赤い縫	口縁部横方向ナデ。内面指頭圧痕有。

遺物観察表 1

因版 番号	遺構 耐位	器種	器形	法量 (cm)			表面色調	特徵	
				口径	器高	底径			
53	ST12	弥生土器	甕	(6.0)	1.0	橙	底部外面タキ成形。内面横方向ナデ調整。底尖。呪様式か。		
54	ST12	弥生土器	鉢	12.8	7.0	3.2	褐灰	内面縦方向ヘラナギ調整。底部貼付け。	
55	ST12	弥生土器	鉢	(5.8)	4.4	橙	摩耗が激しく調整は不明。		
56	ST12	弥生土器	鉢	25.8	11.9	13.9	にぶい橙	深広鉢。外側摩耗。内面ナゲ調整。口縁部に歪み有。	
57	ST12	弥生土器	鉢	(2.0)	5.0	灰灰	内面ハケ調整。底部は貼付。		
58	ST12	土師器	杯	12.6	3.4	7.2	浅黄橙	内面回転ナデ調整。底端回転ヘラ切り痕有。	
59	ST12	土師器	杯	(2.3)	6.8	明黄褐	内面外横方向ナデ。底端回転ヘラ切り→静止ヘラ切り痕有。		
60	ST12	土師器	椀	(1.8)	7.2	浅黄橙	内面回転ナデ調整。底端回転ヘラ切り→静止ヘラ切り痕有。		
61	ST12	土師器	皿	13.8	2.0	8.6	灰白	内面横方向ナデ。ロクロ成形。底部回転ヘラ切り痕有。	
62	ST12	土師器	杯	(2.0)	9.6	浅黄橙	底部回転ヘラ切り痕あり。輪高台が付く。		
63	ST12	土師質土器	杯	14.6	(1.9)	にぶい黄橙	内面回転ロクロ成形。器厚は薄い。		
64	ST12	土師質土器	杯	14.6	(3.7)	にぶい黄	内面回転ロクロ成形。器厚は薄い。		
65	ST12	須恵器	杯身	13.0	3.5	7.6	灰黄	底部回転ヘラ切り痕有。	
66	ST12	須恵器	高杯	10.0	6.6	4.0	灰黄褐	内面ナデ調整。灰釉かかる。	
67	SB1-P54	弥生土器	甕	13.2	(2.6)	にぶい橙	内面縦部ヘラタキ成形。		
68	SB1-P54	弥生土器	甕	22.0	(5.8)	橙	外側縦部から胴部縦方向ナケ調整。内面縦方向ヘラケズリ。		
69	SB1-P77	弥生土器	甕	(2.6)	5.0	橙	底底のみ。内面ハケ調整。		
70	SB1-P50	土師器	盤	(2.3)	にぶい橙	口沿部と外側に煤着有。外側部須恵器有。内面横方向ナデ調整。8C中葉か。			
71	SB1-P32	土師器	杯蓋	14.0	1.8	10.8	橙	内面探ける。外側面ラミガキ。	
72	SB1-P48	須恵器	杯	12.2	4.2	7.4	灰灰	底部輪高台。燒き歪み有。	
73	SB1-P82	須恵器	搗み棒	搗み棒 25	(1.7)	灰黄褐	蓋ワマミのみ。宝珠ワマミだが形化後→扁平への過渡期か。		
74	SH2-P14	弥生土器	甕	10.6	(2.9)	橙	内面外横摩耗しい。		
75	SH2-P14	須恵器	蓋	15.2	1.7	明褐灰	内面口ナデ調整。燒成不良。		
76	SH2-P36	須恵器	皿	(1.3)	9.1	灰白	底底のみ残存。輪高台を呈する。ロクロ成形。		
77	SH2-P37	古式土師器	壺	(3.7)	にぶい橙	外側縦方向擦描き未継有。			
78	SB4-P411	製陶土器	甕	9.2	(3.3)	にぶい黄橙	外側指頭圧印。内面弓目残る。		
79	SB5-P433	弥生土器	甕	12.6	(3.8)	にぶい橙	外側指頭圧印→ハケ成形。内面横方向ハケ調整。		
80	SB5-P434	弥生土器	甕	(4.1)	5.0	にぶい橙	底底のみ残存。摩耗が激しい。		
81	SB5-P790	弥生土器	甕	(1.7)	4.4	にぶい黄橙	脚部外側タキ成形。底部平底。		
82	SB5-P470	弥生土器	高杯	(5.6)	にぶい橙	脚部外側タキ成形へからナデ消す。内面ハケ調整。上部に指頭圧痕有。			
83	SB6-P538	土師器	杯	(2.2)	10.8	浅黄	輪高台。底部外側煤着。内面ナデ調整。		
84	SB6-P563	土師器	皿	14.7	2.4	11.2	にぶい黄橙	底部回転ヘラ切り痕有。	
85	SB6-P594	須恵器	蓋	10.5	(1.8)	灰白	内面ナデ調整。薄手。やや歪みがある。蓋上面に溶着痕有。		
86	SB6-P594	須恵器	皿	16.0	2.7	13.2	灰白	外間に火拂が見られる。	
87	SB7-P441	土師器	移動式壺	(3.6)	にぶい橙	内面に薄く煤付着。外側指頭圧印。内面横方向ナデ調整。			
88	SB7-P466	土師器	皿	17.4	(1.8)	明赤褐	内面と外面ともラミガキ。		
89	SD1	須恵器	蓋	15.2	(2.8)	にぶい黄橙	外側口ロクロ成形。焼け歪みあり。外側中央にワマミ部分欠損の痕か。		
90	SD1	須恵器	蓋	(1.1)	灰灰	扁平ワマミ残存。内面ナデ調整。			
91	SD1-SK6	備前	擂鉢	23.5	9.9	10.1	灰	条状の条縫残る。筋土の跡が残っている。口縁部内面、条縫にナデ消している。	
92	SD1	備前	擂鉢	25.7	(7.9)	明赤褐	口縁部上部を少し削ませ内傾させる。V期か。8条单位の条縫残る。		
93	SD1	備前	擂鉢	(2.0)	13.4	明赤褐	底部内面に放射状の条縫残る。		
94	SD6	近世陶磁器	皿	12.0	(3.4)	灰白	時期・产地不明。底部厚み有。底部内面砂目積有。		
95	SD6	石製品	砥石	全長 6.9	全幅 4.8	全厚 0.8	一	重量 34g。緑泥片岩か。表面、裏面、側面に使用有。	
96	SD6	石製品	叩石	全長 12.3	全幅 6.7	全厚 3.2	一	重量 451g。砂岩。表面・裏面・側面に使用。端部に敲打痕。	
97	SD6	石製品	臼臼	全長 26.0	全幅 16.5	全厚 7.8	一	重量 4500g。砂岩。表面に溝が明確に残る。二次使用の跡痕なし。	
98	SD8	須恵器	盃	(5.8)	7.4	灰黄褐	底部輪高台。		
99	SD8	備前	擂鉢	(5.9)	にぶい赤褐	内面条縫有。V期か。			
100	SD9	須恵器	高杯	(3.3)	10.0	灰	脚部に穿孔有。脚部のみ。		
101	SD10	黒色土器	椀	(4.8)	(3.0)	にぶい黄橙	内里（A類）口縁部のみ黒色。内面横方向ヘラミガキ。		
102	SD13	須恵器	盃	(4.2)	9.0	灰黄	底部輪高台。外側と輪高台の一部に自然軸。		

遺物観察表 2

因版 番号	遺構 耐位	器種	器形	法量 (cm)			表面色調	特徵
				口径	器高	底径		
103	SD13	須忠器	壺か		(5.4)		灰	外面刺突文有。
104	SD13	石製品	叩石	全長 16.8	全幅 5.8	全厚 3.8	—	重量 521g。砂岩。掘りやけい形状。磨耗激しい。
105	SD14	土師器	移動式竈		(5.9)		橙	口唇部と内面に煤付着。外表面横方向にナデ調整。外面上部にヘラで三ヵ所切込み。
106	SD14	土師器	移動式竈		(9.1)	32.0	橙	電子炉の付着がなく、外表面斜め方向にハケナゲ、内面指頭圧痕、後傾方向ナデ
107	SD14	須忠器	横版		(16.2)		黄灰	外面同心円のカギ目文を残す。
108	SD15	須忠器	杯		(1.3)	8.0	灰黄褐	底部偏高台。底部内面フラット。底部外側へラ切りか。
109	SD16	陶磁器	不明	10.4	(3.2)		灰白	口唇部のみ。国産かどうかは不明。
110	SK6	弥生土器	甕	18.8	(16.2)		にぶい鶴	外表面頭部から胴部縦方向ハケ調整。口縁部内面横方向ハケ調整。
111	SK7	弥生土器	広口壺		(2.6)		橙	口唇部に刻み目有。内面ヘタミガキ。接合痕が明確に残る。
112	SK7	土師器	土鍤	全長 4.4	全幅 1.1	全厚 1.1	にぶい鶴	孔径 0.3cm。重量 3.0g。片方欠損。
113	SK16	石製品	臼臼	全長 26.0	全幅 16.6	全厚 6.0	—	重量 3.000g。砂岩。
114	SK31	土師質土器	杯	10.3	3.3	3.8	橙	底面回転余切り痕有。ロクロ成形。
115	SK31	土師質土器	杯	10.2	4.2	5.3	にぶい黄褐	底面回転余切り痕有。ロクロ成形。
116	SK33	土師器	小甕	9.8	1.2	7.0	橙	口縁端部を少し外につまみ出す。ロクロ成形。
117	SK35	土師質土器	小甕	9.7	2.5	5.6	橙	底面回転余切り痕有。ロクロ成形。
118	SK35	土師質土器	小甕	11.2	2.1	5.1	橙	底面回転余切り痕有。ロクロ成形。外側煤付着。
119	SK38	弥生土器	甕	14.4	(2.4)		にぶい鶴	口唇部つまみ出し。内外面とも模ナゲ調節。
120	SK38	弥生土器	甕	14.5	(5.6)		にぶい黄褐	口縁部外側頭頂压痕。外表面頭頂より胴部ハケ調整。
121	SK46	土師器	壺か		(1.2)		橙	外表面ヘタミガキ。口唇部ツマミ出し。
122	SK49	土師質土器	杯	11.0	3.5	4.9	橙	底面回転余切り痕有。ロクロ成形。
123	SK49	土師質土器	杯	11.3	3.9	5.2	橙	底面回転余切り痕有。ロクロ成形。
124	SK49	土師質土器	杯	11.3	3.6	4.8	浅黄褐	底面回転余切り痕有。ロクロ成形。
125	SK49	土師質土器	小甕	8.9	2.4	3.8	橙	底面回転余切り痕有。ロクロ成形。
126	SK51	須忠器	杯	14.4	3.8	10.0	灰黄	内外面ナゲ調整。
127	SK51	須忠器	杯	12.5	1.8	8.4	にぶい黄褐	外表面火拂が残る。回転ナゲ調整。
128	SK52	土師器	杯	11.5	3.4	7.4	にぶい鶴	ロクロ成形。外側黒斑有。
129	SK52	土師器	杯	12.0	3.4	7.4	灰白	底面ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
130	SK52	土師器	杯	12.6	3.6	8.6	にぶい黄褐	底面回転ヘラ切り痕→静止ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
131	SK52	土師器	杯	12.7	3.9	8.2	にぶい黄褐	ロクロ成形。
132	SK52	土師器	杯	12.8	4.3	7.1	にぶい黄褐	底面回転ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
133	SK52	土師器	杯	13.0	3.2	7.7	にぶい鶴	底面ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
134	SK52	土師器	杯	13.5	(3.4)		橙	底面回転ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
135	SK52	土師器	杯	10.8	(1.7)		にぶい鶴	ロクロ成形。
136	SK52	土師器	杯	12.2	(2.4)		橙	ロクロ成形。内面黒斑有。
137	SK52	土師器	杯	12.8	(2.6)		にぶい黄褐	ロクロ成形。ロ縁部外側に強ナゲ。
138	SK52	土師器	杯	14.9	(3.2)		浅黄褐	ロクロ成形。
139	SK52	土師器	杯		(2.4)	6.9	浅黄褐	底面回転ヘラ切り→静止ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
140	SK52	土師器	杯		(1.4)	7.6	にぶい黄褐	底面回転ヘラ切り痕有。ロクロ成形。内面黒斑有。
141	SK52	土師器	杯		(1.0)	6.7	にぶい鶴	底面回転ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
142	SK52	土師器	杯		(1.5)	7.6	浅黄褐	底面回転ヘラ切り→静止ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
143	SK52	土師器	杯		(2.3)	7.8	浅黄褐	底面回転ヘラ切り→静止ヘラ切り痕有。ロクロ成形。
144	SK52	土師器	杯		(1.0)	7.9	浅黄褐	底面回転ヘラ切り痕あり。ロクロ成形。
145	SK52	土師器	甕	11.5	1.5	7.9	にぶい黄褐	底面ヘラ切り痕あり。ロクロ成形。
146	SK52	土師器	移動式竈		(3.3)		橙	底（ひさし）部分。外表面横方向にハケ調整。口縁部水平に取り戻す。内面横方向の粗いハケ調整。
147	SK52	土師器	甕		(4.9)		浅黄褐	外表面頭部に縱方向ハケ調整。内面横方向の粗いハケ調整。
148	SK52	土師器	土鍤	全長 3.3	全幅 1.6	全厚 1.5	—	孔径 0.4cm。重量 8.0g。両端面凹。
149	P5	古鉄		2.3	2.3	0.15	—	重量 2.0g。寛永通宝。劣化激しい。
150	P22	須忠器	杯身	7.4	2.3	5.0	灰	7世紀後半の製品か。
151	P27	土師器	土鍤	全長 (2.7)	全幅 1.15	全厚 1.1	—	孔径 0.4cm。重量 3.0g。両端が欠ける。

遺物観察表 3

因版 番号	遺構 部位	器種	器形	法量 (cm)			表面色調	特徴
				口径	器高	底径		
152	P27	須忠器	蓋	12.2	(2.9)		灰	外面部ともナデ調整。口唇部に明確な立ち上がり有。
153	P66	弥生土器	甕	17.7	(8.1)		にぶい黒	外面部頸部から胴部横方向のタキ成形。内面縦方向ナデ調整。
154	P98	弥生土器	鉢か		(5.4)		オリーブ黒	外面部斜め方向タキ成形。器壁厚い。
155	P106	弥生土器	甕	12.0	(3.3)		にぶい黒	口縁部内面横方向ナデ調整。口唇部ハケ、横方向ナデ調整。
156	P115	土師器	杯	11.2	2.5	6.0	にぶい黒	ロクロ成形。
157	P131	弥生土器	甕	(4.3)	3.0		にぶい黒	外面部斜め方向ハケ調整。内面指頭圧痕。
158	P195	近畿陶磁器	皿	12.8	2.8	4.0	にぶい黄澄	底部内面、蛇の目に輪郭ぎする。輪高台小さめ。
159	P244	石製品	砥石	全長 10.5	全幅 6.5	全厚 3.7	—	重量 423g。表面と側面に擦り痕有。
160	P258	須忠器	皿	14.2	2.0	12.2	黄灰	外面部ともナデ調整。回転ヘラ切りか。8世紀後半。
161	P285	須忠器	蓋	10.8	(3.4)		褐	外面部ともナデ調整。
162	P348	石製品	砥石	全長 3.1	全幅 3.8	全厚 1.1	—	重量 21.0g。表面、裏面、側面に擦り痕。
163	P359	須忠器	杯身	12.6	2.4	7.8	灰白	燒成不良。内面は土器のような赤色を呈し摩耗激しい。
164	P388	弥生土器	甕	(4.4)	4.4		橙	外面部斜め方向タキ成形。底部平底。
165	P391	弥生土器	甕	20.0	(5.2)		にぶい赤褐色	口縁部外面部頭圧痕へラナデ調整。口唇部面取り。胎土に長石含む。
166	P427	弥生土器	甕	30.6	(4.9)		にぶい黄澄	口縁部外面部横方向のナデ。
167	P427	土師器	高脚脚部	(13.4)	12.9		浅黄澄	心棒成形。底部外輪部へラマギキ。
168	P451	弥生土器	甕	15.4	(11.0)		黒褐	外面部横方向ハケ調整。内面斜め方向の強いナデ調整。口縁部端を小さく折る。
169	P451	弥生土器	甕	(15.0)	4.0		黒褐	外面部横方向ハケ調整。内面斜め方向の強いナデ調整。底部平底。
170	P451	弥生土器	甕	(14.6)	5.4		にぶい赤褐色	底部外面部指頭圧痕で成形。底部縱方向ハケ調整。
171	P467	弥生土器	甕	15.1	(6.0)		にぶい橙	口縁部外面部とも横方向ナデ調整。脚部外面部斜め方向ハケ調整。
172	P502	土師器	摘み	鏡み径 2.5	(1.5)		明赤褐	扁平摘み。
173	P519	須忠器	杯	(2.3)	8.4		灰	外面部ともナデ調整。回転ヘラ切りか。外面部2ヵ所ハケ調整。
174	P577	須忠器	皿	16.0	2.3	13.4	灰	外面部ともナデ調整。
175	P579	土師器	杯	13.4	4.1	7.7	橙	ロクロ成形。口唇部内側する。
176	P585	土師器	杯	11.1	3.4	8.1	橙	ロクロ成形。底部回転へラ切りしたのちナデ調整。
177	P585	須忠器	皿	15.5	2.4	13.7	灰	底部回転ヘラ切り。
178	P585	土師器	羽釜	22.6	(3.7)		にぶい黄澄	口縁部微い。折津型C型。
179	P619	土師器	摘み	鏡み径 2.4	(1.2)		にぶい橙	扁平摘み。
180	P638	土師器	口縁部		(4.8)		橙	口縁部下に鏡目突起付。外面部斜め方向ハケ調整。
181	P712	須忠器	杯身	10.0	4.0	7.3	褐灰	外面部ヘラケツ調整。内面ナデ調整。
182	P733	土師器	羽釜		(6.5)		にぶい黄澄	口縁部のみ。折津型羽釜か。(10~11世紀)。
183	P805	ミニコア土器	底盤		(2.7)	2.0	にぶい黒	外面部指頭圧痕。
184	P834	土師器	杯		(2.6)		明褐	内面ヘラマギキ。
185 ①	包含層	弥生土器	甕	16.6	(7.5)		橙	二重口。外面部口縁部下に指頭圧痕。帯巻に鏡み日が施され頭部は縦方向のハケ調整。底部外面保護する。外面部横方向タキ成形。内面頭部から胴部にかけて指頭圧痕。
185 ②	包含層	弥生土器	甕	16.6	(28.2)	5.4	橙	二重口。外面部ナデ調整。口唇部指頭圧痕残る。口縁部下斜め方向ハケ目有。
186	包含層	弥生土器	甕	16.6	(4.3)		橙	二重口。外面部のみ残存。V-3様式か。
187	包含層	弥生土器	甕	16.6	(5.0)		橙	口縁部のみ。V-3様式か。
188	包含層	弥生土器	甕	20.4	(4.5)		橙	口縁部内面横ナデ調整。二重口。
189	包含層	弥生土器	口縁部	17.4	(5.5)		橙	口縁部内面に強い横方向ナデ調整。外面部縦方向にハケ調整。
190	包含層	弥生土器	甕	25.0	(2.0)		橙	広口広口縁部。口縁部落葉を拭去し櫛刷波状文造らす。VI-2様式か。
191	包含層	弥生土器	甕	24.6	(1.5)		にぶい黄澄	広口広口縁部。胎土粗い。V-5様式か。
192	包含層	弥生土器	甕		(1.9)		橙	広口広口縁部。口唇部に格子の刻み目を施す。内面横方向ハケ調整。
193	包含層	弥生土器	甕		(2.4)		浅黄澄	広口広口縁部のみ。口唇部に凹み、縦方向の沈線有。
194	包含層	弥生土器	甕	8.4	(7.3)		灰褐	口縁部のみ。外面部横方向タキ成形。内面ハケ目で調整。
195	包含層	ミニコア土器			(3.9)	2.0	にぶい赤褐色	底部のみ残存。指頭圧痕観。
196	包含層	弥生土器	甕	15.1	25.1	2.5	明赤褐	口縁部外面部頭圧痕。口縁から底部にかけて外面部横方向タキ成形。VI-2様式か。
197	包含層	弥生土器	甕	14.0	(14.2)		にぶい橙	V-5様式か。外面部口唇部に横方向ナデ、頭部斜め方向ハケ調整。胴部タキ成形。
198	包含層	弥生土器	甕	18.0	(8.3)		にぶい橙	V-3様式か。口縁部外面部ナデ調整。胴部内面縦方向ナデ調整。
199	包含層	弥生土器	甕	16.2	(5.2)		橙	口縁部内面横方向ナデ調整。胴部外面部横方向タキ成形。VI-2様式か。
200	包含層	弥生土器	甕	17.8	(5.7)		にぶい黄澄	口縁部外面部縦方向ハケ調整。胴部外面部横方向タキ成形。

遺物觀察表 4

図版 番号	遺構 部位	器種	器形	法量 (cm)			表面色調	特徵	
				口径	器高	底径			
201	包含層	弥生土器	甕	(7.9)		にぶい赤褐色	胴部のみ。外面横方向タキ目を一部縱方向ハケで消す。内部縱方向ナデ調整。		
202	包含層	弥生土器	甕か	(9.0)	48	にぶい黄褐色	胴部から底部にかけて残存。外面縱方向ハケ調整。内部縱方向ナデ調整。		
203	包含層	弥生土器	甕か	(5.1)	36	にぶい黄褐色	底部外面縱方向ハケ調整。底部内部指頂压痕→縱方向ハケ調整。		
204	包含層	弥生土器	甕か	(4.5)	34	にぶい黄褐色	底部のみ。外面縱方向ハケ調整。内部対応ハケナデ調整。		
205	包含層	弥生土器	甕か	(3.5)	35	橙	底部のみ。内部縱方向ハケ調整。		
206	包含層	弥生土器	甕か	(3.3)	60	にぶい赤褐色	底部のみ。外面縱方向ハケ調整。		
207	包含層	弥生土器	甕	(3.3)	50	橙	底部のみ。外面縱方向ハケ調整。V~4様式か。		
208	包含層	弥生土器	鉢	(3.9)	38	橙	丸底から立ち上がる。底部内部指頂压痕。胴部内部横方向ハケ調整。		
209	包含層	弥生土器	丸底甕か	(2.7)	62	にぶい赤褐色	外側胸部から底部にかけてハラミガキ。		
210	包含層	弥生土器	鉢	29.6	(5.8)	橙	外面右上からタキ目成形。右脇部外面横み出し。内面横方向ハケ調整。		
211	包含層	弥生土器	鉢	24.7	(5.2)	にぶい黄褐色	外面口縁部指頂压痕。内面口縁部横方向ナデ調整。		
212	包含層	弥生土器	鉢	22.0	(4.6)	明褐色	指頂压痕。指頂压痕曲して外反する。磨耗激しい。		
213	包含層	弥生土器	鉢	20.4	(3.0)	灰褐色	胎土に呉哥石。内面口縁部から胴部にかけて左へガリハケ調整。		
214	包含層	弥生土器	鉢	20.9	8.0	6.8	にぶい黄褐色	内面口縁部ハケ調整。底部外面に塗刷痕が明確に残る。	
215	包含層	弥生土器	鉢	20.0	11.0	4.0	橙	外面タキ目成形。内面口縁部横方向ナデ調整。胴部から底部にかけてハケ調整。	
216	包含層	弥生土器	鉢	22.4	(8.8)	にぶい橙	外面覆る。外面口縁部横方向ハケ調整。胴部タキ目成形。内面縱方向左ハナデ調整。		
217	包含層	弥生土器	鉢	17.6	7.7	4.5	にぶい黄褐色	外側横方向タキ目成形。ナデ消。内部反射状にハケ調整。底部小さい。	
218	包含層	弥生土器	鉢	13.1	8.1	37	灰褐色	外側横方向タキ目成形。内面縱方向ナデ調整。	
219	包含層	弥生土器	鉢	8.0	7.3	10	にぶい赤褐色	外面口縁から胴部にかけてハケ調整。胴部から底部にかけてハラミガキ。	
220	包含層	弥生土器	鉢	17.0	(4.7)	オリーブ黒	外面焼ける。内面縱方向ナデ調整。口脇部に凹窓有。		
221	包含層	弥生土器	鉢	18.0	(6.7)	にぶい橙	内外面指頂压痕。外側縱方向ハケ調整。		
222	包含層	弥生土器	鉢	15.2	(4.3)	橙	内外面口縁部ナデ調整。外側縱方向ハケ調整。内面対応ナデ調整。		
223	包含層	弥生土器	鉢	12.0	(2.6)	褐	底部内面横方向ハケ調整。内面反射状にハケ調整。内面対応ナデ調整。		
224	包含層	弥生土器	高杯	18.6	(4.5)	橙	口縁部内面横方向ハケ調整。外側反射状にハケ調整。		
225	包含層	弥生土器	高杯	(9.4)		橙	外側ヘラミガキ。内面絞り目残る。胎土は粗い。		
226	包含層	弥生土器	高杯	(8.7)	135	にぶい橙	外側縱方向ヘラミガキ。径1cmの円孔あり。底部内部ハケ調整。		
227	包含層	弥生土器	高杯	(7.6)		橙	内面指頂压痕。間に1cm程の穿孔。外側縱方向ヘラミガキ調整。		
228	包含層	弥生土器	高杯	(4.6)		橙	磨耗激しい。内面指頂压痕。		
229	包含層	土師器	製塙土器	6.8	(5.5)	灰	内面帯目痕残る。		
230	包含層	土師器	杯	13.3	29	7.4	にぶい黄褐色	回転クロク成形。底部回転ヘラ切り痕有。	
231	包含層	土師器	杯	13.0	39	7.6	にぶい黄褐色	回転クロク成形。底部回転ヘラ切り痕有。内面黒帯有。	
232	包含層	土師器	杯	14.1	30	9.0	にぶい橙	外側とも横方向ナデ調整。底部内面ヘラミガキ。	
233	包含層	土師器	杯	13.0	33	7.8	橙	回転クロク成形。底部回転ヘラ切り痕有。	
234	包含層	土師器	杯	11.1	26	52	橙	外側指頂压痕。内面ナデ調整。丸みがあり器壁薄い。	
235	包含層	土師器	杯	(2.5)	9.6	橙	輪高台。底部外面高台ヘラミガキ。		
236	包含層	土師器	皿	(1.7)	95	明赤褐色	外側捏てる。輪高台。		
237	包含層	土師器	皿か杯	(2.0)	100	橙	輪高台。外側ナデ調整。		
238	包含層	黒色土器	杯	(2.8)	87	にぶい黄褐色	内面黒色。丁寧な横ナデ調整を施す。底部外面回転ヘラ切り痕有。		
239	包含層	黒色土器	底部	(1.5)	80	にぶい黄褐色	内面黒。底部内面ヘラミガキ。輪高台。		
240	包含層	土師器	皿	13.0	24	49	橙	回転クロク成形。底部回転ヘラ切り痕有。	
241	包含層	土師器	皿	13.8	20	90	にぶい黄褐色	回転クロク成形。底部回転ヘラ切り痕有。外側底部黒帯有。	
242	包含層	土師器	皿	14.9	(19)	橙	回転クロク成形。外側黒帯有。		
243	包含層	土師器	皿	14.3	17	67	にぶい黄褐色	回転クロク成形。底部回転ヘラ切り痕有。外側黒帯有。	
244	包含層	土師器	杯	13.8	4.1	80	橙	回転クロク成形。外側内面ヘラミガキ。	
245	包含層	土師器	杯	17.0	43	106	橙	回転クロク成形。内面内面ヘラミガキ。底部回転ヘラ切り痕有。	
246	包含層	土師器	杯	(1.3)	100	橙	内面ともヘラミガキ。底部ナデ調整。		
247	包含層	土師器	杯	(1.4)	95	にぶい橙	底部内外面ヘラミガキ。		
248	包含層	土師器	皿	15.5	1.5	120	橙	内面ヘラミガキ。	
249	包含層	土師器	皿	(1.6)	138	橙	輪高台。底部内面ミガキ。底部外側ナデ調整。		
250	包含層	土師器	蓋	横み挂	3.2	(1.8)	にぶい橙	内面内面ヘラミガキ。扁平横みが付く。	
251	包含層	土師器	蓋	横み挂	2.9	(1.8)	明赤褐色	扁平横み有。内外面丁寧なヘラミガキ。	

遺物観察表 5

因版 番号	遺構 耐位	器種	器形	法量 (cm)			表面色調	特徵
				口径	器高	底径		
252	包含層	土師器	蓋か	21.0	(2.1)		浅黃褐	内外面ミガキ調整。抹みは見られないが蓋か。
253	包含層	土師器	移動式蓋		(42)		にぶい橙	底(ひさし)部分。外面縱方向ハケ調整。内面に彫り付着。
254	包含層	土師器	移動式蓋				灰褐	底(ひさし)部分。口唇部丸く収める。横方向ナデ調整。内面に縦付着する。
255	包含層	土師器	羽葉		(5.7)		にぶい橙	内外面横方向ナデ調整。
256	包含層	土師器	不明		(3.6)		橙	口縁部下に穿孔。外側縱方向ナデ調整。
257	包含層	古式土師器	斐	16.4	(3.0)		にぶい橙	口縁部内面横方向ハケ調整。外面は横方向ナデ調整。
258	包含層	土師器	土鍤	全長 3.9	全幅 1.1	全厚 —	孔径 0.4cm、重量 40g、両端欠損の管状土鍤。	
259	包含層	土師器	土鍤	全長 3.6	全幅 2.0	全厚 1.6	—	孔径 0.6cm、重量 110g、ほぼ完形。胴部一部欠損した管状土鍤。
260	包含層	土師器	土鍤	全長 3.8	全幅 2.5	全厚 2.4	—	孔径 0.8cm、重量 170g、片方欠損。管状土鍤。
261	包含層	土師器	土鍤	全長 4.6	全幅 1.7	全厚 1.7	—	孔径 0.6cm、重量 110g、片方欠損。管状土鍤。
262	包含層	土師器	土鍤	全長 6.2	全幅 2.1	全厚 2.1	—	孔径 0.4cm、重量 220g、両端欠損。管状土鍤。
263	包含層	綠釉陶器	匪	12.9	3.7	6.0	浅黃	輪高台、ロクロ成形。外面に緑釉かかる。
264	包含層	古式土師器	底部	(0.8)	8.2		橙	墨書き器。文字は判読不能。両面ヘラミギキ。
265	包含層	須恵器	杯	12.8	3.8	7.4	灰	胴部外面に墨書きあり。「月丈」の一字。底部回転ヘラ切机。
266	包含層	須恵器	杯か	(0.9)	11.0		灰	底部外面に墨書きあり。「月丈」の一字。器形不明。
267	包含層	須恵器	盤か	(0.7)			灰黃	底部外面に墨書きあり。「典」の一文字。
268	包含層	須恵器	杯か	(1.4)	11.0		灰	底部外面に墨書きの断片。文字は不明。輪高台。
269	包含層	不明	鉢	23.6	(11.5)		灰黃褐	内外面ケズリ調整。口縁部外側する。
270	包含層	須恵器	鉢	18.2	(7.1)		灰黃	胴部外面に一条の沈継溝ある。
271	包含層	須恵器	蓋か	19.6	(8.0)		灰白	外面ハケ調整。内面に荒い同心円状のタタキ目。
272	包含層	須恵器	斐	27.0	(5.9)		灰	内外面ナデ。胴部外面タタキ目。
273	包含層	須恵器	斐	25.7	(6.8)		暗灰黃	内外面強いナデ調整あり。胴部外面タタキ目。
274	包含層	須恵器	口縁鉢	24.0	(4.0)		灰黃	外面に自然無が見られる。口唇部に凹線が延る。
275	包含層	須恵器	平盤か	21.5	(13.7)		灰黃	SK4出土遺物が同一個体の可能性高い。内面焼け歪み有。
276	包含層	須恵器	盃	(2.7)			灰黃	口縁部下に段差。帆船技による跡か。
277	包含層	須恵器	蓋か	(2.9)			灰黃	刷毛のみ。小型虚か。外面にヘラ描き沈継による格子目有。
278	包含層	須恵器	蓋か	(7.4)			灰白	胴部外面に一条の沈継。下部に二条の凹継巡る。内面回転ナデ調整。
279	包含層	須恵器	蓋か	(4.5)	9.6		褐鐵	底部外面輪高台との境に強い回転ナデ調整。
280	包含層	須恵器	蓋か	(5.8)			灰	文様がⅡ期のものと酷似。外面上に波状文有。
281	包含層	須恵器	楕	11.2	(4.2)		灰	内外面強い回転ナデ。口縁部下方に二条の凸継巡らす。
282	包含層	須恵器	楕	13.4	4.0	8.0	灰黃	底部外面の調整不明。
283	包含層	須恵器	皿	17.8	2.1	15.6	灰	内外面ナデ調整。
284	包含層	須恵器	蓋	13.4	4.4		灰黃	天井部へ切込。平らにした形跡がなく難。内外面回転ナデ調整。
285	包含層	須恵器	蓋	12.4	1.8		灰黃褐	内面ナデ調整。外面回転ヘラ切痕有。8世紀後半か。
286	包含層	須恵器	蓋	(1.9)			にぶい赤褐	底部外面回転ロクロ調整。抹みが付いていた形跡有。
287	包含層	須恵器	蓋	10.6	(2.2)		灰	口縁端部に立ち上がりの間隔が広い。
288	包含層	瓦質土器	底部	(4.6)			灰	胴部外面に文様有。
289	包含層	須恵器	杯蓋	14.2 摸み径 1.5	1.9		灰黃	内外面に強い回転ナデ。扁平摸みが付く。
290	包含層	須恵器	杯蓋	摸み径 2.7	(2.4)		暗灰黃	宝珠摸み。摸み下の内面が膨らんでいる。
291	包含層	須恵器	杯蓋	摸み径 2.4	(1.4)		暗灰黃	扁平摸み。
292	包含層	須恵器	摸み	摸み径 2.4	(1.3)		灰	扁平摸み。
293	包含層	須恵器	杯身	11.0	3.5	4.2	灰	内外面強い回転ナデ。口縁部の形状Ⅲ期に近いか。
294	包含層	須恵器	杯身	12.4	3.7	9.0	灰白	内外面強い回転ナデ。口縁部の形状Ⅲ期に近いか。
295	包含層	須恵器	杯身	11.0	3.2	5.6	灰	内外面強い回転ナデ。口縁部の形状Ⅲ期に近いか。
296	包含層	須恵器	杯身	11.0	3.3	6.6	灰	内外面強い回転ナデ。口縁部の形状Ⅲ期に近いか。
297	包含層	須恵器	杯身	11.2	(2.7)		灰	内外面回転ナデ。口縁部の形状Ⅲ期に近いか。

遺物観察表 6

図版 番号	遺構 耐位	器種	器形	法量 (cm)			表面色調	特徴
				口径	器高	底径		
298	包含層	須恵器	杯身	15.8	3.6	11.6	灰白	内外面回転ナメ。外面部自然釉かかる。底部平ら。
299	包含層	須恵器	杯身	15.2	2.6	8.2	灰褐色	内外面強い回転ナメ。外面部自然釉かかる。
300	包含層	須恵器	杯身	18.0	(2.6)		灰	内外面回転ナメ。外面部自然釉かかる。
301	包含層	須恵器	杯	12.7	3.4	7.8	陶灰	制部内外面とも横方向ナメ調整。底部外側回転へう切痕有。
302	包含層	須恵器	杯	13.5	2.7	9.4	灰白	内外面ナメ調整。
303	包含層	須恵器	杯	13.3	3.9	8.0	灰白	焼成不良。底部回転ヘラ切り痕。
304	包含層	須恵器	杯	14.7	3.9	11.0	灰白	底部回転ヘラ切り痕。内外面ナメ調整。輪高台。
305	包含層	須恵器	杯	17.0	5.6	10.1	灰黃	内外面ナメ調整。輪高台。
306	包含層	土師器	杯か	(3.8)	8.4		にぶい橙	ロクロ成形。制部外側に縱方向ナメ調整。
307	包含層	土師質土器	杯	10.9	3.8	4.6	橙	ロクロ成形。底部回転系切り痕有。
308	包含層	土師質土器	杯	9.9	4.2	4.4	橙	ロクロ成形。底部回転系切り痕有。
309	包含層	土師質土器	杯	9.6	4.1	5.0	にぶい橙	回転ロクロ成形。瓶部回転系切り痕有。
310	包含層	土師器	杯	13.7	3.9	8.6	にぶい橙	回転ロクロ成形。底面静止ヘラ切り痕か。
311	包含層	備前	活鉢		(4.2)		明赤褐	16世紀。V期か。口縁部下から横目残る。
312	包含層	備前	活鉢		(5.9)		灰褐色	16世紀。V期か。口縁部下から7条单位の横目残る。
313	包含層	土師質土器	焰燈	31.4	(2.8)		灰褐色	外面輝ける。内面横方向ナメ調整。
314	包含層	陶器	広東碗	10.2	6.5	5.6	灰白	見込みに梅文。内外面及び高台内まで施釉。高台外側に朱須で一条巡らす。
315	包含層	陶器	紅猪口	4.8	1.5	1.3	灰白	腹前陶磁か。外面部器。18世紀か。
316	包含層	石製品	石鑼	全長 2.4	合幅 2.3	全厚 1.5	—	重量 2g。サヌカイト製。先端欠損する。
317	包含層	石製品	叩石	全長 15.8	合幅 6.1	全厚 4.9	—	重量 616g。砂岩。表面に擦り跡が残る。上下に敲打痕がある。
318	包含層	石製品	叩石	全長 14.6	合幅 7.9	全厚 5.3	—	重量 901g。砂岩。叩き石と考えられるが石台としても使用したか。敲打痕有。
319	表様	石製品	磨製石斧	全長 8.4	合幅 4.8	全厚 1.6	—	重量 103g。泥岩か。両面に擦痕有。
320	表様	石製品	石鍤	全長 14.5	全幅 7.0	全厚 2.8	—	重量 465g。砂岩。中央付近左右にくびれがある。

II 区 遺物観察表

図版 番号	遺構 耐位	器種	器形	法量 (cm)			表面色調	特徴
				口径	器高	底径		
1	包含層	弥生土器	鉢	(6.0)	3.6	にぶい黄橙	外面部縱方向ハケ調整。外面部底付近にタタキ目。内部指頭压痕。	
2	包含層	弥生土器	鉢	(3.0)	2.5	橙	外面部縱方向ハケ調整。外面部底付近にタタキ目。内部指頭压痕。	
3	包含層	須恵器	台付き鉢	18.0	(7.5)	暗オリーブ褐	無蓋の台付き鉢。外面部施釉。口縁部外反する。外面部に模様有。	
4	包含層	須恵器	胴部	(5.0)		黄褐	外面部液状文。内面は無釉。	

遺物観察表 7

図版 1



空中写真（南から）



空中写真（北から）

図版 2



調査前風景（北から）



調査前風景（北から）



ST9 検出状況（北東から）



ST11 セクションと遺物出土状態（南から）

図版 4



SD13 と SD15 セクション（南から）



SK32 セクション（南から）



SK33 セクション（南から）



SK52 セクション（南から）

図版 6



P538 セクション（南から）



山田エコクラブ発掘調査体験（2019.4.27）



片地小学校発掘調査体験（2019.5.8）



楠目小学校発掘調査体験（2019.7.12）

図版 8



香美市生涯学習フォーラム現地見学会の様子（2019.9.28）



I 区完掘状況（北から）

図版 9



ST3 土師器高坏（13）出土状態（南西から）



ST9 弥生土器壺（20）出土状態（南から）



ST11 セクション（東から）



ST11 弥生土器出土状態（西から）



SD11 セクション（南から）



SK18 セクション（南から）

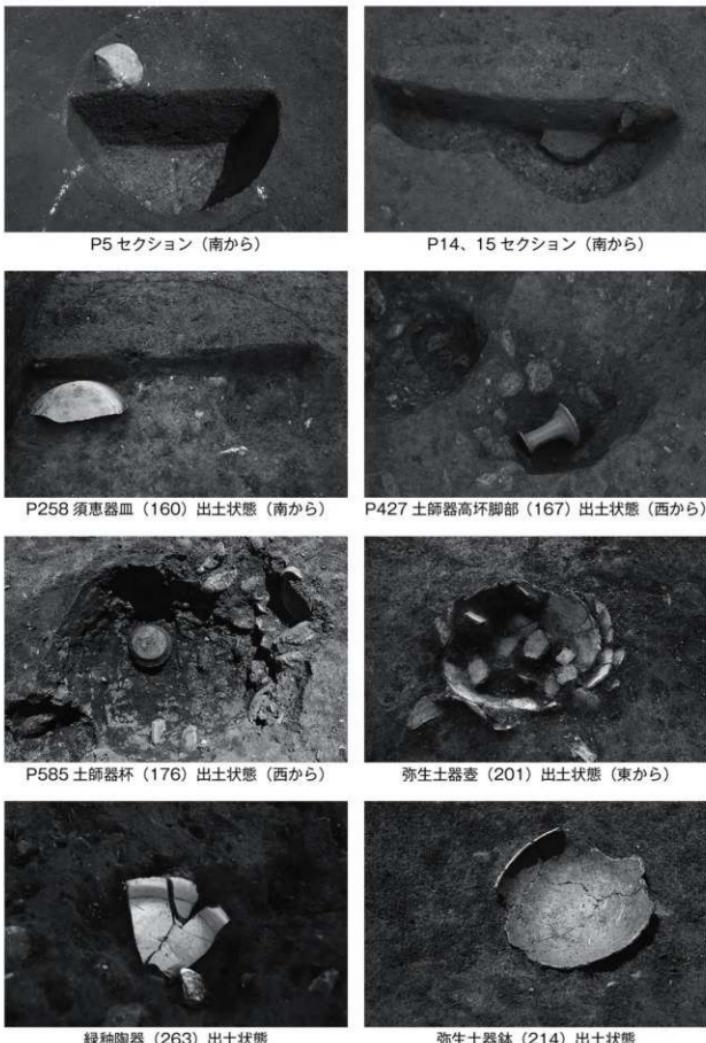


SK23、24 セクション（南から）



SK31 土師質土器杯（115）出土状態（東から）

図版 10



图版 11



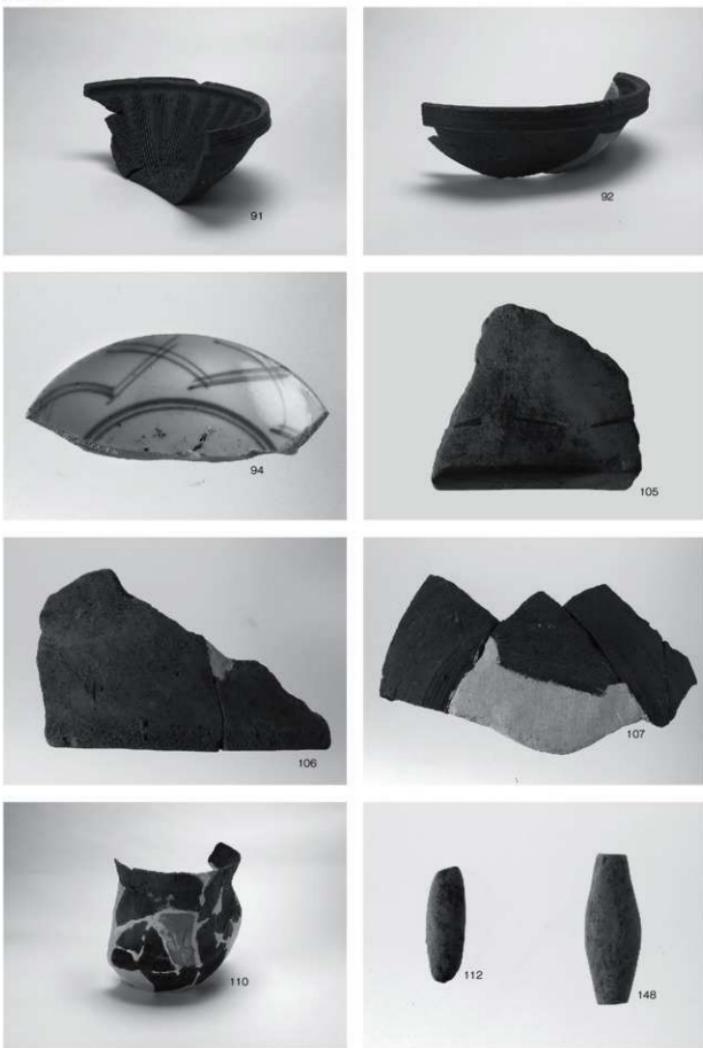
図版 12



图版 13



図版 14



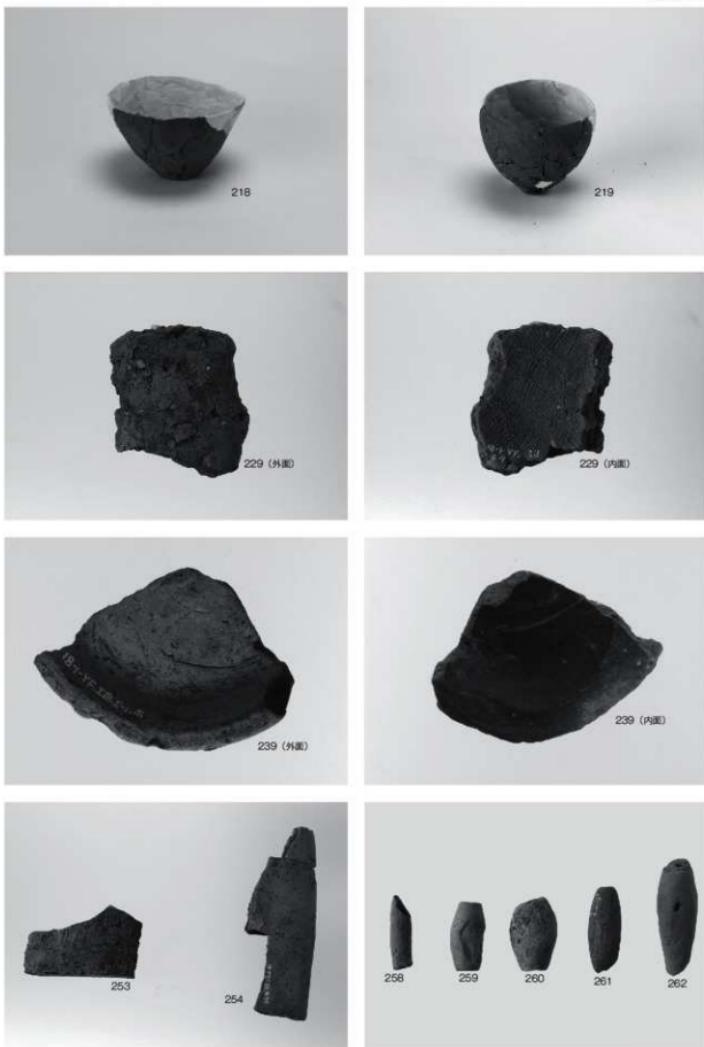
图版 15



図版 16



图版 17



図版 18



ふりがな	ふしはらいせき							
書名	伏原遺跡							
副書名	香美市立図書館建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	香美市教育委員会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	小林 麻由							
編集機関	香美市教育委員会							
所在地	〒782-8501 高知県香美市土佐山田町宝町1丁目2番1号							
発行年月日	2022年2月28日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
伏原遺跡	高知県 香美市 土佐山田町 楠目	39120	190119	33° 61' 10"	133° 69' 36"	2019.2.12 ~ 2019.9.30	I区 2,570m ² II区 118m ²	記録保存調査
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
伏原遺跡	集落跡	弥生 古墳 古代 中世 近世 近代	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 溝跡	石器類 弥生土器 土師器 須恵器 縄文陶器 土師質土器 備前焼 近世陶磁器	弥生時代後期後半から古代にかけての 堅穴住居跡、古代の掘立柱建物跡、焼成土坑、近世のハンダ土坑を検出した。 また、墨書き土器及び縄文陶器が包含層から出土する。 古代の焼成土坑からは土師器片が多く出土している。			
要約	伏原遺跡は、弥生時代から近代にかかる複合遺跡である。今回の調査では弥生時代後期後半から古代にかけての堅穴住居跡、古代の掘立柱建物跡、焼成土坑、近世のハンダ土坑を検出した。 弥生時代後期から古墳時代にかかる土器、須恵器等が確認されている。古代では縄文陶器、墨書き土器、焼成土坑から多量の土師器片が出土した。							

香美市教育委員会発掘調査報告書第3集

伏原遺跡

香美市立図書館建設に伴う発掘調査報告書

2022年2月28日

発行 香美市教育委員会

〒782-8501

高知県香美市土佐山田町宝町1丁目2番1号

TEL 0887-53-1082

印刷 有限会社西村謄写堂